



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書
Relation	(2013). 北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書. 北海道大学
Issue Date	2013-03-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82908
Rights	本報告書の著作権は北海道大学にあります
Type	report
File Information	hokkaidoU_report_201303_Part5.pdf, Part5



発掘に関する記録は、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」、発掘人骨台帳の単頁複写物（75頁、111～113頁）、電子ファイルホルダー「発掘人骨台帳（抜粋）」、静内発掘No 1～No166の整理リスト（ハードコピー）、発掘現場の写真、児玉作左衛門「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」等の論文である。

八雲町遊楽部の旧アイヌ墓地発掘後に、児玉作左衛門は北海道警察部刑事課の取り調べを受けたが、罪は問われていない。それ以降の発掘は、1934年10月19日発布の「人骨発掘発見ニ関スル規程」（北海道庁令第八十三号）が定めた手続きに従って行われた。

児玉作左衛門は、八雲町遊楽部・八雲町落部村・千島占守島での発掘について、八雲町遊楽部・八雲町落部村・札幌市において慰霊祭を執り行い、八雲町遊楽部・八雲町落部村・色丹島に慰霊碑を建立した。

4. アイヌ墓地の戦後の発掘

4-1. 解剖学第一講座（山崎春雄教授、伊藤昌一教授、岡田正夫教授、松野正彦教授）によるアイヌ墓地の発掘

解剖学第一講座は、松野正彦が教授であった時期に、静内郡静内町川合（1962年）、静内町豊畑共同墓地（1971年・1972年）において発掘した。

解剖学第一講座では、松野正彦が急死した1977年までアイヌ研究を行っていた。

発掘の記録は、川合はアイヌ納骨堂内の四肢骨箱中の紙箱に「37.11.10発掘 静内川合の骨盤」と、豊畑は四肢骨箱の包装（新聞紙）に「豊畑試掘 昭46」と、ラベルに「昭和47年7月調査」等とある。また、松野正彦は「日高アイヌ頭蓋における前頭・傾頭骨連接について」（1973年講演抄録）において、「昭和31年以来」、川合・豊畑で発掘したと述べている。

川合発掘の契機は不詳である。豊畑共同墓地発掘は、静内町が実施した改葬にともなうものである。

なお、川合発掘のアイヌ人骨は、アイヌ納骨堂内の四肢箱中に、少なくとも8体の寛骨（骨盤）が確認された。それ以外の部位の所在は不詳である。豊畑共同墓地発掘のアイヌ人骨32体は、アイヌ納骨堂内の四肢箱中に混在していた。いずれも、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」には記載がなく、従来は医学部収蔵アイヌ人骨と把握されていなかった。

4-2. 解剖学第二講座（児玉作左衛門教授、伊藤昌一教授）によるアイヌ墓地の発掘

解剖学第二講座は、平取町長知内（1952年）、根室市（1954年）、岩内町（1956年・1957年）、静内町静内駅前共同墓地（1956年）、千歳市墓地（1958年）、帯広市伏古共同墓地（1963年）、千歳市（1965年）、江別市対雁共同墓地（1965年）において発掘した。

解剖学第二講座では、伊藤昌一が定年退官する1971年までアイヌ研究を行っていた。

発掘の記録は、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」、発掘人骨台帳の単頁複写物75頁、静内発掘No 1～No166の整理リスト（ハードコピー）、教室日誌である。江別市対雁共同墓地については、解剖学第二講座が作成した『江別市対雁樺太アイヌ共同墓地調査概要』、発掘現場の写真がある。

発掘の契機は、静内町静内駅前共同墓地、帯広市伏古共同墓地、江別市対雁共同墓地は管理する自治体が実施した改葬である。その他については不詳である。

4-3. その他

アイヌ納骨堂内の四肢骨箱中に様似町様似海岸発掘（1959年）の4体が、古人骨中に平取町二風谷

発掘（1959年）の1体が混在していた。解剖学第一講座・解剖学第二講座のいずれが発掘したかは不詳であり、発掘経緯と発掘地の詳細も不詳である。

これら5体は「アイヌ民族人体骨発掘台帳」には記載がなく、従来は医学部収蔵アイヌ人骨と把握されていなかった。

Ⅳ－２．収蔵アイヌ人骨の保管

１．アイヌ人骨計測方法とアイヌ人骨の保管

解剖学第一講座・解剖学第二講座における主なアイヌ研究は、形質人類学的研究であった。形質人類学研究方法として20世紀に普遍化していたマルチン法により、「アイヌの人種的帰属」の究明を目的に、頭蓋骨の各部位を計測して統計処理し、他民族計測データとの比較を行った。形質人類学上最も重要な人骨は頭蓋骨であった。そのため、発掘アイヌ人骨から頭蓋骨を分離して計測作業を行うのが常態であった。計測後には、両講座とも元の状態に戻して四肢骨と一体とする措置をとらず、頭蓋骨を別置して保管した。

２．頭蓋骨以外のアイヌ人骨の保管

上述の研究方法に規定され、解剖学第一講座・解剖学第二講座は、アイヌ人骨を一体毎に保管し、発掘アイヌ人骨情報も一体毎に記録して管理する体制にはなかった。頭蓋骨以外の部位は、一般的に研究資料とされることがほとんどないという事情も重なって、四肢骨箱に未整理の状態では保管され続けることとなった。

３．特定の部位を分離したアイヌ人骨の保管

多くはないが、解剖学第一講座・解剖学第二講座では、保存状態の良好な寛骨（骨盤）等を四肢骨から分離して研究を行ったこともあった。計測後には元の四肢骨箱に戻すことなく、袋や箱にまとめて別置した。そのために、別置した部位はいずれの四肢骨に属していたのかを特定することが困難となってしまった。

４．研究資料として未利用のアイヌ人骨の保管

豊畑共同墓地・様似海岸で発掘したアイヌ人骨のように、発掘後に未整理状態のままで保管され続けた人骨もある。それらは、研究資料として利用するために整理する途上で、何らかの事情で作業が中断され、資料として未利用のまま、頭蓋骨・四肢骨共に四肢骨箱内に混在して保管されていた。

Ⅳ－３．アイヌ納骨堂建設と供養祭基金設置の経緯

１．アイヌ墓地発掘・アイヌ人骨収蔵に関する海馬沢博の批判と要求

1980年11月27日、北海道大学と医学部は、海馬沢博から解剖学第二講座教授児玉作左衛門が行ったアイヌ墓地発掘は「盗掘」だと指弾され、アイヌ人骨の返還を要求された。

医学部長は、解剖学第一講座・解剖学第二講座関係者に問い合わせ、資料の提供を求めた。そのうえで、1982年2月3日に、海馬沢博に対して「ご指摘のありました人体骨発掘に関する一連の事項につ

いて、当時の関係者から事情を聴取し、また、記録関係を詳細に調査いたしました。……特段に非違な点は認められませんでした。……当時の関係官庁及び各地の関係者と協議の上、適正な方法で人体骨の発掘を行い丁寧な慰霊祭等を実施したと聞き及んでおります」と表明した。

2. 北海道ウタリ協会の要求に対する北海道大学医学部の対応

2-1. 北海道ウタリ協会の要求

1982年6月9日、北海道大学は、ウタリ協会から4項目、すなわち①供養施設の建設、②供養祭の実施、③供養祭費用の負担と供養祭基金の設置、④発掘アイヌ人骨の返還を要求された。

ウタリ協会に対しては、主に医学部が対応した。

2-2. 供養施設の建設

医学部は、ウタリ協会に、「アイヌ人骨保管施設」を医学部敷地内に建設すると応じた。

「アイヌ人骨保管施設」は、1984年7月25日に「標本保存庫」として竣工した。竣工してほどなく、施設呼称を「アイヌ納骨堂」と改めた。

2-3. 供養祭の実施

医学部は、ウタリ協会に、供養祭はウタリ協会が主催して執り行うよう求めた。

第1回供養祭は、1984年8月11日に開催された。それ以後、毎年1回8月にアイヌ納骨堂において、ウタリ協会が主催して執り行われている。

2-4. 供養祭基金の設置

医学部は、ウタリ協会に、供養祭基金を設置すると応じた。

第1回供養祭費用の過半は、解剖学第一講座・解剖学第二講座関係者の募金によった。また、「アイヌ人骨供養祭基金」は、医学部同窓会が1985年7月～1988年3月に取り組んだ募金によって、設置をみた。1988年8月4日、医学部はウタリ協会と北海道大学医学部保管のアイヌ人骨の供養祭基金に関する「確認書」を取り交わし、8月6日にはウタリ協会に基金を渡した。

2-5. 発掘アイヌ人骨の返還

医学部は、返還希望があれば、ウタリ協会を通じて協会支部へ返還すると応じた。

医学部は、ウタリ協会旭川支部（1985年、5体）、同釧路支部（1985年、7体）、同帯広支部（1987年、19体）、同三石支部（1995年、1体）、同門別支部（2001年、3体）を返還した。返還したアイヌ人骨は合計で35体である。

2-6. 北海道大医学部と北海道ウタリ協会との「確認書」

医学部は、北海道大学医学部保管のアイヌ人骨の供養祭基金に関する「確認書」において、「アイヌ人骨の収集及びその保存並びに研究等にかかる歴史的経過とその問題、さらに納骨堂建設、……基金の創設過程も含めて人事異動により関係職員が変わっても正しく継承されるよう配慮する」と述べた。

医学部は、納骨堂を建設し、供養祭基金を創設した。しかし、自ら記した「アイヌ人骨の収集及びその保存並びに研究等にかかる歴史的経過とその問題」を「正しく継承」するために、アイヌ墓地発掘・アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査を行おうとはしなかった。

Ⅳ－４．アイヌ人骨管理の実状

１．アイヌ納骨堂建設以前

解剖学第一講座・解剖学第二講座は、①医学部解剖学法医学講堂（1922～1968年）、②医学部標本庫（1938年～1968年）、③医学部基礎医学実験研究棟（1968年～1984年）・基礎医学研究棟（1970年～1984年）において、講座毎にアイヌ人骨を保管していた。そのための管理台帳の所在は作成していたかどうかも含めて不詳である。

２．アイヌ納骨堂建設以後

1984年、医学部はアイヌ納骨堂の建設に際し、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」にもとづいて、発掘地域毎のアイヌ人骨体数1,004体（内、不在葬40体）を算出した。医学部は、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」はすべてのアイヌ人骨を記載していると判断して、解剖学第一講座・解剖学第二講座収蔵アイヌ人骨の現況を把握せずに、アイヌ納骨堂におさめた。そして、アイヌ納骨堂にはすべてのアイヌ人骨がおさめられていると判断した。その後、アイヌ納骨堂収蔵アイヌ人骨を一体毎に確認し、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」と照合することがないまま経過した。

しかし、電子ファイルホルダー「発掘人骨台帳（抜粋）」からは、アイヌ納骨堂を管理している医学部事務部は、アイヌ納骨堂内の頭蓋骨・四肢骨の現況が「アイヌ民族人体骨発掘台帳」と異なっていること、すなわちアイヌ納骨堂にはあるのに「アイヌ民族人体骨発掘台帳」には記載がなく、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」には記載があるのに堂内にはないという事例に気付いていたことが窺える。

本調査報告書作成と並行して、2010～2012年度に医学部によって、アイヌ人骨を一体毎に照合・確認する作業が初めて行われた。その結果、アイヌ納骨堂内の四肢骨箱には、従来収蔵を確認していなかった豊畑共同墓地発掘の32体、様似海岸発掘の4体が含まれていること、頭蓋骨箱1個に複数の頭蓋骨をおさめたり、四肢骨箱1個に複数の四肢骨をおさめてある例も少なくないことが判明した。一方、古人骨中には、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」に記載がある頭蓋骨、返還したはずの旭川・釧路・厚賀発掘の頭蓋骨等が混在していることが判明した。

いずれの事態も、すべては解剖学第一講座・解剖学第二講座が、発掘当初から収蔵アイヌ人骨の記録を一体毎に正確に作成せず、頭蓋骨・四肢骨を一体化させた保管・管理を行っていなかったことに起因する。また、医学部が1984年にアイヌ納骨堂におさめた際に、両講座の保管現況を確かめずに措置したことも小さくない原因である。

Ⅳ－５．「北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書」とアイヌ人骨管理体制の確立

本調査報告書は、アイヌ墓地発掘・アイヌ人骨収蔵経緯に関する北海道大学所蔵文書・資料及び関係研究論文等の悉皆調査を行ない、能う限りの事実を明らかにした。

医学部は、収蔵アイヌ人骨の照合調査を行い、可能な限り頭蓋骨と四肢骨とを一体的に管理する新たな体制を整備した。医学部は、2013年度の供養祭までに、原則的にアイヌ人骨を一体毎に木箱におさめてアイヌ納骨堂に収蔵し直す運びとなっている。

北海道大学と医学部は、本調査報告書と新たなアイヌ人骨管理体制にもとづき、収蔵アイヌ人骨の管理を厳正に行う所存である。

1) それぞれ(野村愛介「北海道アイヌ頭蓋骨に於ける齲齒に就て」(『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第2輯、1936年12月)の30・45・53頁。引用文中の〔 〕は、引用者による補記である。以下、特に断わらない。

2) 本報告書で引用する資料には、現代にそぐわない用語・表現があるが、原文のまま表記する。

3) 「アイヌ民族人体骨発掘台帳」の「挟み込みの75頁」は、単頁複写物の75頁に記載してある静内・杵臼・厚賀・野深・東幌別・平取・上貫気別・幌泉・長知内・門別、単頁複写物の111頁に記載してある野深・杵臼・東幌別、単頁複写物の112頁に記載してある平取・荷負・上貫気別、単頁複写物の113頁に記載してある平取・杵臼を、「日高国 日高」に一括し、被葬者氏名・没年・埋葬年・発掘時等を削除し、通し番号(日高1～日高40)を付したものである。

この「挟み込みの75頁」中の日高番号を解剖学第二講座が作成した時期は、下記の(1)(2)から判断して、1950～1951年である。

(1) 単頁複写物の111～113頁の内容は、解剖学第二講座が1950年2月24日に解剖学第一講座から移管をうけたアイヌ人骨であること。

(2) 上田米三郎(解剖学第二講座専攻生)の学位請求論文「日高アイヌ歯牙の人類学的研究」(1952年1月10日審査結了・教授会通過、1952年2月16日学位授与)は、「挟み込みの75頁」中の日高番号(日高1～日高16、日高18～日高30)で、アイヌ人骨を研究資料として用いていること。

北海道ウタリ協会浦河支部編・発行『四十年のあゆみ』(1986年、54頁)は、医学部収蔵アイヌ人骨(浦河町杵臼発掘の頭蓋骨)2体の写真を掲載している。写真は、アイヌ納骨堂におさめる1984年前後に撮影したものと考えられる。頭蓋骨をおさめた木箱(木製トレイ)には、1箱に2枚ずつラベルの貼付が見られる。ラベルは、1箱には「日高17」・「杵臼9」、もう1箱には「日高16」・「杵臼8」とある。新旧番号が一目瞭然に判別できるように貼付されていることから、解剖学第二講座は日高番号(日高1～日高40)でアイヌ人骨を保管し、そのリストを発掘人骨台帳75頁に挟み込んだものと考えられる。

4) 2008年7月31日付医学研究科長本間研一宛北海道大学総長依頼「「アイヌ民族人体骨発掘台帳」の保有等の確認について(依頼)」(海大第841号)、2008年8月5日付北海道大学総長宛医学研究科長本間研一回答「「アイヌ民族人体骨発掘台帳」の保有等の確認について(回答)」(海大医第381号)。

5) 渡辺雅彦からの聴き取りは、2011年10月11日に教授室において行った。

6) 北大医学部五十年史編纂委員会『北大医学部五十年史』北海道大学医学部創立五十周年記念会館建設期成会、1974年、341～342頁。

小野純一編『わが七十七年の歩み』(山田豊治、1961年、121～122頁)において、有馬英二は、この「最初の日高アイヌの結核検診」について、次のように述べている。

昭和元年夏私は初めて日高アイヌの結核検診を行った。……

アイヌに多い疾患として当時まで発表されて居たのは、日高に最も多く住んで居たためアイヌ病院が設置されて其の診察に当って居た医師の経験が基になって居たのは当然であるが、まだ学問的研究が行われては居なかったので同族に結核が多いとか、黴毒が多いとかの発表はあっても、どこまで信頼し得られるものか闡明されなかった。そこで我内科で最初にアイヌの結核に付ての確実な調査研究を始めたのであった。これ等の結果は一々学会に発表した、日本結核病学会総会で故有馬頼吉君等のアイヌの結核は処女地結核であるとの見解には、我内科の結果では反対せざるを得なかった。アイヌと和人との交渉は徳川幕府時代からであり既に数百年に及んで居る。

有馬英二は、後に「アイヌ総合研究」に参画し、「同一部落ニ住居スル和人、土人両種族ノ結核ニ対スル感受性ハ絶対的ノモノデハナクテ、部落ヲ異ニスル時、換言スレバ環境ノ異ナルニ従ヒ或ハ和人ニ大トナリ、或ハ土人ニ大トナル」(有馬英二他「「アイヌ」児童ノ結核感染ニ関スル調査(第二報)」(第

- 14回日本結核病学会総会抄録)、『結核』第14巻第5号、1936年5月、386頁)と、結核感染者の多寡は民族的特性ではなく、環境に決定づけられていると主張した。
- 7) 『北大医学部五十年史』288～290頁。児玉作左衛門は、解剖学第二講座では1929年頃にはアイヌ頭蓋骨は「二〇個ぐらい」所蔵していたと述べている(児玉作左衛門「脳と頭蓋骨の研究二十年」、北海道大学医学部同窓会編・発行『北大医学部25周年記念 北大医学部同窓会誌』1950年、24頁)。ただし、収蔵経緯等には言及がない。
- 8) 『北大医学部五十年史』329～330頁。
- 9) 『同上』401頁。
- 10) 『北海道帝国大学医学部 研究業績目録 大正十二年—昭和十一年』、『北海道帝国大学医学部 研究業績目録(補遺) 大正十二年—昭和十一年』、北海道大学医学部小児科学教室『永井一夫名誉教授業績目録 自大正15年至昭和26年』(1960年)によるとともに、論文末の参考文献等から追加した。論文はすべて掲載誌と照合し、上記目録中に誤記がある場合は訂正した。
- 11) 平光吾一・椎名順二・中野曄・新藤省三・佐野好「アイヌ人体質の研究(其一)」、『人類学雑誌』第45巻第1号、1930年1月、5～8頁。
- 12) 「同上」1～3頁。
- 13) 1928年1月1日付『北海タイムス』。引用に際して、適宜句読点を補った。以下、特に断わらない。
- 14) 平光吾一・椎名順二・中野曄・新藤省三・佐野好「アイヌ人体質の研究(其一)」36頁。平光吾一が述べた「最近の大庭氏の研究」は、大庭眞咲「腎臓ノ位置ニ関スル比較解剖学的考察」(『解剖学雑誌』第2巻第2号、1929年6月)である。大庭眞咲は、腎臓の位置を哺乳動物14種と成人44例の腎臓下極の位置を比較して、哺乳動物は「原則トシテ右側頭位」(132頁)、人類は「一般ニ右側低位」(133頁)と結論付けている。平光吾一は「欧州人及日本人に於ては腎は大多数に於て左高である」と述べているが、大庭眞咲が挙げた44例中左高は26例、右高は7例、不明は11例であった(130頁)。
- 15) O生「いけまの霧 アイヌ研究余話」、『フラテ』第27号、1934年7月、50頁。
- 16) 1936年7月10日付『時事新報』(北海樺太版)は、1936年7月7日の日本民族衛生学会〔日本民族衛生協会第5回学術大会〕席上で、山崎春雄が平村ペンリウク計測結果を発表したと述べているが、『民族衛生』には該当する記事は見当たらない。
- 17) 伊藤昌一「アイヌ頭蓋の研究史」、『北海道医学雑誌』第46巻第4号、1971年7月、243頁。
1931年に山崎春雄らが発掘・収蔵したアイヌ人骨を資料とした最初の研究論文は、野村愛介「アイヌ頭蓋骨下顎犬歯根の分岐例に就て」(『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第2輯、1936年12月)である。野村愛介は、解剖学教室収蔵の日高アイヌ頭蓋骨中26体(内、男16体、女10体)のうち、杵臼発掘の「頭蓋骨番号 アイヌ第11号 男 成年」を資料として利用した。
- 18) 平村ペンリウク頌徳碑除幕式を撮影したフィルムは《資料37》に所収。なお、平村ペンリウク頌徳碑題字を揮毫したのは、北海道帝国大学総長佐藤昌介である。
- 19) 1933年10月16日付『帝国大学新聞』。
- 20) 1933年8月27日付『北海タイムス』。
- 21) 1933年10月16日付『帝国大学新聞』、1933年10月17日付『北海道帝国大学新聞』。
- 22) 「特別及ビ小委員会一覧表 昭和11年3月31日」、日本学術振興会編・発行『特別及ビ小委員会ニヨル総合研究ノ概要 第1回』1936年11月、3～5頁。なお、「アイヌノ医学的民族生物学的調査研究」とある第8小委員会のテーマは、日本学術振興会編・発行『日本学術振興会要覧 昭和九年五月』(1934年、138頁)では、「アイヌ人ノ医学的民族生物学的総合研究」とある。
- 23) 『特別及ビ小委員会ニヨル総合研究ノ概要 第1回』1頁。
- 24) 1933年10月19日付『北海タイムス』。
- 25) 坂野徹は、日本学術振興会の「アイヌ研究」への「研究費補助」の背景として、①第3回汎太平洋

学術会議（1926年、東京）の「人類学及び人種学」分科会で「アイヌ民族、その起源と他民族との関係」が取り上げられ、「アイヌへの国際的な関心の高さを日本の研究者に印象づけ」たこと、②日本学術振興会が「国運ノ興隆並人類ノ福祉ニ貢献スル」との理念を掲げて「海外の研究者と伍して競争していくことが可能な分野への研究助成も盛んに行われた」ことを挙げながら、「当時、改めて認識されたアイヌへの国際的関心の高さが、研究成果を「世界の学会へ発表せん」とする学振での研究費補助につながったと考えられる」と述べている（「われらが内なる「他者」—アイヌ同化政策と人類学研究（Ⅱ）」、『生物学史研究』No71、2003年、5頁。後に坂野徹『帝国日本と人類学者 一八八四—一九五二年』勁草書房・2005年に所収）。

26) 『特別及び小委員会ニヨル綜合研究ノ概要 第1回』1頁。

27) 科学史家広重徹は、日本学術振興会の「真の意義」は、特別委員会・小委員会を組織して推進した「総合研究」にあったと次のように述べている。

学振の経費は年々増大しているのに個人援助はかえって減少している。それに代わって、年々強化されたのは総合研究である。これは、学振の下に問題に応じて、各方面の研究者を集めた特別委員会、小委員会を組織し、これらの委員会において共同研究、組織研究を行なったものである。戦前、戦時中に設置された委員会の延数は、特別委員会が三〇あまり、小委員会が約一〇〇に達する。これらの総合研究は研究の大規模化からの要請によるところはもちろんであるが、それだけでなく、当初から、それによって学術研究を社会的・経済的課題に結合させること、および大学、官庁、民間企業の研究者のあいだの協力体制を実現することがもくろまれていたのである（広重徹『科学と歴史』みすず書房、1965年、160～161頁）。

28) 「第8小（アイヌ）委員会概要（昭和11年5月）」、『特別及び小委員会ニヨル綜合研究ノ概要 第1回』56～57頁。

29) 「特別及び小委員会一覧表 昭和11年3月31日」、『同上』4頁。

30) 『同上』66～67頁。

31) 坂野徹は、「アイヌ総合研究」の「主体」は日本民族衛生学会と北海道帝国大学の医学者だが、「その中心となったのが」永井潜と古屋芳雄であり、「あくまでも研究の中心は医学者、しかもドイツの優生学（民族／人種衛生学Rassenhygiene）の影響を受けた研究者」で、「厳密な意味で人類学者と呼べるのは……児玉作左衛門ひとりにすぎない」と述べている（坂野徹「われらが内なる「他者」—アイヌ同化政策と人類学研究（Ⅱ）」5頁）。

しかし、「アイヌ総合研究」の中心となったのは永井潜・古屋芳雄だとするのは、11人の第8小委員会委員中8人は北海道帝国大学医学部教官であったこと、永井潜は委員長ではあったが「中心」として何をなしたのかは定かではないこと、古屋芳雄の「日本及「アイヌ」民族に於ける両性出生比率の研究＝出生比率に及ぼす社会及生物学的影響の調査＝」（『民族衛生』第3巻第1号、1933年9月、3～45頁）は、同じ古屋芳雄の「本邦の両性出生比率に関する社会生物学的研究」（『民族衛生』第1巻第4号、1931年10月、1～17頁）の「続編」と見なすべきほどの論文であることに鑑みて、中心とするにはやや無理がある。坂野徹は「あくまでも研究の中心は医学者」と記しているが、11人の委員全員が医学者であった。

また、人類学者と呼べるのは「児玉作左衛門ひとり」との指摘も的外れである。児玉作左衛門が北海道帝国大学医学部教授に就任した1929年5月から、門下生の野村愛介と共に「八雲アイヌ人頭骨に於ける齧歯に就いて」を発表した1935年7月までの間の、研究発表リストは以下のようである。

①S. KODAMA, *Pathologisch-anatomische Untersuchungen mit Bezug auf die sog. Basalganglien und ihre Adnexe.*, 1929.（『所謂大脳基底核とその付属器の病理学上の解剖学的検査について』）

②児玉作左衛門「淡蒼球ノ形態学的研究補遺」（第37回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第2巻第2号、1929年6月

③児玉作左衛門「人腦ノ灰白結節ノ形態及ビ構造ニ就テ」(第38回日本解剖学会集会演説抄録)、『解剖学雑誌』第3巻3号、1930年6月

④児玉作左衛門「硬腦膜に現れる、雛嚢の大腦に及ぼす影響に就いて」(第41回日本解剖学会集会演説抄録)、『解剖学雑誌』第6巻4号、1933年4月

⑤児玉作左衛門「上大腦静脈ト上矢状洞トノ連携ニ就テ」(第42回日本解剖学会集会演説抄録)、『解剖学雑誌』第7巻、1934年[号・月不明]

児玉作左衛門が人腦解剖学に関する研究を発表し続けているのは一目瞭然である。「アイヌ研究」にかかわるのは「アイヌ総合研究」参画以降であり、参画以降も⑤を発表していた。1935年までの児玉作左衛門は「人腦解剖学」を本領とする解剖学者であった。

32) 1933年12月16日付『北海タイムス』。なお、今裕が正式に委員となったのは1934年2月である。

33) 『同上』。

34) 『特別及ビ小委員会ニヨル綜合研究ノ概要 第1回』57～58頁。

35) 日本學術振興會編・発行『特別及ビ小委員会ニヨル綜合研究ノ概要 第7回 16年度』1943年、6頁、付表(其ノ3)。第8小(アイヌ)委員会解散後も、1939年度4,300円、1940年度2,200円、1941年度2,000円が措置された。

36) 「古屋博士のアイヌ研究旅行」(「雑報」、『民族衛生』第2巻第2号、1932年8月、92頁)では、8月7日付永井潜宛古屋芳雄書簡を以下のように紹介している。

漸く十ヶ所斗りの視察を了へて、唯今南海岸の寂しい部落鷗川と云ふ所迄辿りつき候。……明日より、鐵路なき奥地へ入ること、相成居り候。唯困るのは、食事と宿屋に候。此度は、主として戸口調査と視察とを行ふ積で、成るべく広く廻る覚悟に候。来年より測定に取りかゝる予定なるも、相当の苦心と存ぜられ候。

37) 古屋芳雄「日本及「アイヌ」民族に於ける両性出生比率の研究＝出生比率に及ぼす社会及生物学的影響の調査＝」、『民族衛生』第3巻第1号、1933年9月。古屋芳雄は、「『アイヌ』民族を利用しての生物学的影響の調査からは、材料の過小と、届出でられざる死産の過大のために正確な結論を引出すことが出来なかつた」(45頁)と述べている。彼は、調査地を明記しないまま、「イサンマリの家系図」、2,066家族と7,030人の児童数を掲げている。にわかに、調査対象数の多寡、あるいは「材料の過小」と「正確な結論」を得られなかつたこととの関係を論ずることはできない。「材料の過小」となれば、「『アイヌ』民族を利用しての生物学的影響の調査」のために、古屋芳雄がさらに多くのアイヌ民族調査を「渴望」していたとの推測はたやすい。

38) 「学会雑誌」(『民族衛生』第3巻第2号、1933年12月、100頁)に、以下のような記事が載っている。

次に御報告したいのはアイヌ人の民族生物学的研究の開始であります。此の問題は昨夏既に古屋常務理事の北海道視察旅行となり、アイヌ部落の戸口調査が行はれましたが、継続事業とし、毎年夏季休暇を利用し永井教授外駒井、古屋教授其他北大の各専門大家との提携によつて調査団を組織し、絶滅に類せるアイヌ民族の体質、衰亡の原因、混血問題等の重要事項を調査研究し、世界の学界へ発表せんとするもので、今回學術振興會より研究費の補助が決定されましたので、永井理事長は……振興會理事林春雄教授と同道して雪の北海道へ予備調査へ御出発の事となりました。

「駒井」は駒井卓(京都帝国大学理学部教授、専門：遺伝学)である。なお、駒井卓は第8小(アイヌ)委員会「アイヌノ医学的民族生物学的調査研究」には参加していない。永井潜・林春雄の来札目的は、「予備調査」ではなく第8小(アイヌ)委員会第1回委員会開催のためであった。この記事には我田引水のきらいはあるが、その一方で、日本民族衛生学会就中永井潜・古屋芳雄が日本學術振興會へ働きかけたことを示唆してもいる。

39) 1933年12月16日付『北海タイムス』。

40) 『特別及ビ小委員会ニヨル綜合研究ノ概要 第1回』1頁。

- 41) 『医学部解剖学第一講座：大正10年（1921年）～平成10年（1998年） 大学院医学研究科脳科学専攻 神経機能学講座分子解剖学：平成10年（1998年）～ 井上芳郎教授退職記念：昭和53年（1978年）～平成18年（2006年）』を参照した。
- 42) 山崎春雄「旭川市近文「アイヌ」部落ニ於ケル「アイヌ」人ノ生体測定」、『日本聯合衛生学会々誌』第8巻、1936年7月、100頁。
- 43) 山崎春雄「「アイヌ」人容貌の人類学的観察」、『警察医連合大会第二回紀事』1937年10月、119頁。
- 44) 日本学術振興会編・発行『特別及ビ小委員会ニヨル綜合研究ノ概要 第2回』1938年1月、89頁。
- 45) 日本学術振興会編・発行『特別及ビ小委員会ニヨル綜合研究ノ概要 第3回』1939年1月、139～140頁。
- 46) 日本学術振興会編・発行『特別及ビ小委員会ニヨル綜合研究ノ概要 第4回 13年度』1940年4月、138～139頁。
- 47) 日本学術振興会編・発行『特別及ビ小委員会ニヨル綜合研究ノ概要 第5回 14年度』1941年1月、192～193頁。
- 48) 日本学術振興会編・発行『特別及ビ小委員会ニヨル綜合研究ノ概要 第6回 15年度』1941年12月、194頁。
- 49) 岡田正夫「アイヌの指紋掌紋の研究 第一報 沙流地方アイヌ指紋に就て」、『民族衛生』第4巻第5・6号、1935年12月、113頁。
- 50) 伊藤昌一「故山崎春雄先生（1886～1961）」、『解剖学雑誌』第37巻第3号、1962年6月、177～178頁。
- 51) 指紋型については、古畑種基「日本人指紋の研究」（古畑種基編『指紋の論文集』第一輯、犯罪学雑誌発行所、1935年）を参照した。
- 52) 医学部「アイヌ民族人骨発掘・研究・保存等に関する一覧」、「アイヌ人骨についての対応（2）」532頁。4頁で述べておいたように、「アイヌ人骨についての対応（2）」は、「アイヌ人骨についての対応（1）」とともに、1980～1985年の間における北海道大学と医学部のアイヌ人骨問題への対応資料の複写をファイルに綴じたものである。以下、「対応（2）」、「対応（1）」と略記する。
- なお、アイヌ納骨堂収蔵の頭蓋骨箱に「北見」と記載があるのは、「北見1」～「北見25」の25箱（内訳、常呂21体、網走4体）である。児玉譲次は、アイヌ納骨堂へ収蔵する前の25箱について、「アイヌ民族人骨発掘・研究・保存等に関する一覧」で言及したものと考えられる。しかし、児玉譲次の言及を裏付ける資料・根拠は見当たらず、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」及び電子ファイルホルダー「発掘人骨台帳（抜粋）」にも符合していない。
- 53) 『特別及ビ小委員会ニヨル綜合研究ノ概要 第6回 15年度』191～192頁。
- 54) 大場利夫（1929～1966年まで医学部解剖学第二講座の助手・講師を務め、1954年より北方文化研究室幹事を兼任。1966～1976年文学部教授・附属北方文化研究施設勤務）が、北方文化研究施設に保管・利用していたアルバムと考えられる。
- 55) 児玉作左衛門「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第1輯、1936年11月、1～2頁。
- 56) 「アイヌ民族人体骨発掘台帳」47頁。
- 57) 児玉作左衛門「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」13頁。
- 58) 「同上」13頁。

松本光治は、「現職員表」（北海道八雲高等学校創立70周年記念誌編集委員会編『遊楽部山河に幾星霜 創立70周年記念誌 北海道八雲高等学校』北海道八雲高等学校創立70周年記念協賛会、1994年、38頁）によれば、1930～1938年に八雲中学校に在職し、博物を担当していた。教員免許は博物（植物・動物）を取得していた。松本光治の履歴は、藤田征晴「松本光治先生」（『北海道生物教育会誌』第21号、

1999年、4頁)を参照した。

児玉作左衛門の八雲訪問は、北海道帝国大学医学部3年生榊原徳太郎が、発掘に参加したと記している1934年5月18～21日と重なると考えられる(榊原徳太郎「八雲アイノ古墳墓発掘随伴記」、北海道帝国大学医学部学友会『フラテ』第27号、1934年7月、75頁)。

- 59) 児玉作左衛門「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」3頁。
- 60) 「同上」13～14頁。
- 61) 榊原徳太郎「八雲アイノ古墳墓発掘随伴記」77頁。
- 62) 児玉作左衛門「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」14頁。
- 63) 「同上」14頁。
- 64) 「同上」15頁。
- 65) 「同上」18～19頁。
- 66) 児玉作左衛門「ドクロとともに アイヌ研究の三十年」、1959年3月16日付『北海道新聞』朝刊。解剖学者である児玉作左衛門が頭蓋骨を「ドクロ」と記すことはあり得ないし、事実記したことはない。同記事本文中にも「ドクロ」という語を用いていない。「ドクロ」は、「鬼面人を驚かす」たぐいの俗に流れた新聞社の作為である。
- 67) 児玉作左衛門「緊急を要したアイヌ研究——私のあゆんだ道」、『からだの科学』第26号、1969年3月、148頁。
- 68) 児玉作左衛門「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」19頁。
- 69) 掲載箇所は、「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」の12頁(「第三図 遊楽部とトイタウシナイ川及其の附近の図」、16～17頁(「第五図～第八図」、21～23頁(3体の埋葬状況スケッチ)、21～23頁(6体の埋葬状況の概要)、巻末(3体の埋葬状況写真)、7～8頁(「第一表 八雲遊楽部土人名簿 昭和九年五月調」、24頁(「第三表 八雲遊楽部アイヌ発掘例内訳表」)である。
- 70) 児玉作左衛門「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」29～30頁。
- 71) 「同上」33頁。児玉作左衛門は、「副葬品、例へば刀剣、銚、煙管、耳輪、鎌、飾玉等についての詳細な記載、並にその年代或は伝来地等に関することは、稿を改めて発表する」(34頁)と述べているが、その機会はなかった。なお、八雲遊楽部以外の地における発掘に際して、どのような副葬品を得たのかを記していない。
- 72) 伊藤昌一「八雲アイヌの埋葬法」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第1輯、1936年11月、113～123頁。

伊藤昌一は、故老に聴き、司馬力弥・椎久年蔵・冷田フルチャリ・小ヶ谷シモに依頼して、男女の埋葬様式を模型屍体を用いて実施してもらい、かつ遊楽部アイヌの葬儀に参列し、それらを総合して「八雲アイヌの埋葬法」を著したと述べている(113頁)。
- 73) 児玉作左衛門「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」2～3頁。
- 74) 上記論文に「5月23日」とあるのは児玉作左衛門の記憶違いか誤植である。
- 75) 金子信尚『北海道人名辞書』北海民論社、1923年、403頁。北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園博物館は、松田武策が収集したアイヌ関係資料を収蔵している。
- 76) 椎久年蔵・松田武策・松木光治と犬飼哲夫(哲男より改名)とは、アイヌ人骨発掘以前から交流があった。犬飼哲夫の1932年版手帳(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園博物館所蔵)には、「郵便局長／(八雲郵便局)／椎久トヨタラク」と書込がある。「郵便局長」は松田武策、「椎久トヨタラク」は椎久年蔵である。犬飼哲夫旧蔵資料に「八雲 松木 一九三三、七、一」とメモランダムを付した子熊が写っている写真(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園博物館所蔵)がある。犬飼哲夫「熊の習性」(『植物及動物』第1巻第1号、1933年1月)には、「熊が殺した牛を土で蔽ひ隠したところ(八雲中学松木教諭撮影)」とキャプションを付した写真が載っている(61頁)。

77) 北海道庁立八雲中学校郷土研究会編・発行『熊に関する座談会 北海道庁立八雲中学校郷土研究会報告第十三号』（1933年12月11日）、函館市立図書館所蔵。

なお、八雲中学校第7期生「修学旅行記念アルバム」（修学旅行：1933年6月、北海道八雲高等学校沿革記念室所蔵）には、犬飼哲夫・武笠耕三等と一緒に松木光治が写っている写真がある。旧蔵者は記録者として「熊の座談会に俺も出席した」と書き込んでいる。

78) 榊原徳太郎「八雲アイノ古墳墓発掘随伴記」75～76頁

79) 児玉作左衛門「ドクロとともに アイヌ研究の三十年」。

80) 1934年6月18日付『小樽新聞』。河野本道編著『アイヌ史新聞年表―「小樽新聞」(昭和期Ⅱ) 編一』（國學院短期大学コミュニティカレッジセンター、2009年）を参照した。

81) 「人骨発掘発見ニ関スル規程」（北海道庁令第八十三号、1934年10月19日）、『北海道庁公報』第530号、1934年10月19日、4頁。

82) 児玉作左衛門「緊急を要したアイヌ研究——私のあゆんだ道」148頁。

83) 「人骨発掘発見に関する規程発布に就て」、『北海道庁公報』第530号、14頁。

84) 1934年10月28日付『東京朝日新聞』夕刊（北海道樺太版）。「真理を探るもの ②北大研究室から／「人類の孤島」／アイヌは何人種か／医学部解剖学教室」との見出しである。「北大解剖学教室における研究資料アイヌの頭骨」とキャプションを付した写真も載せている。

85) 同上。

86) 1938年11月4日付『東京日日新聞』夕刊（北海道樺太版）。

87) 児玉作左衛門「アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷の研究」、『北方文化研究』第1輯、1939年3月、23頁。

88) 野村愛介「北海道アイヌ頭蓋骨に於ける齲歯に就て」45頁。

89) 児玉作左衛門「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」15・18頁。

90) 児玉作左衛門「アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷の研究」34頁。

91) 「同上」35頁。

92) 野村愛介「北海道アイヌ頭蓋骨に於ける齲歯に就て」53～54頁。

93) 「アイヌ民族人体骨発掘台帳」76頁。

94) 「同上」26頁。

95) 児玉作左衛門「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」19～20頁。

96) 野村愛介「北海道アイヌ頭蓋骨に於ける齲歯に就て」30頁。

97) 渡辺左武郎「児玉先生の憶い出——戦前のアイヌ墳墓発掘のことなど」、『北海道の文化』第21号、1971年3月、5頁。ただし、回想の典拠とした渡辺左武郎の「日誌」は現存が確認されなかった。

98) 児玉作左衛門「緊急を要したアイヌ研究——私のあゆんだ道」149頁。

99) 函館地方法務局八雲支局。土地区画もやや異なっている。

100) 渡島教育会落部村支会編・発行『落部村郷土史』1939年、94頁。

101) 『同上』94～95頁。

102) 1969年7月30日付『北海道新聞』夕刊。記事には、児玉作左衛門は「さっそく荷造りして返すという」とある。石碑が八雲に届いた日は不詳。

103) 児玉作左衛門「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」19頁。

104) 児玉作左衛門「アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷の研究」44頁。

105) 小林覚一「森アイヌ歯牙の人類学的研究」、『北大解剖研究報告』第83号、1958年2月、4頁。

106) 「同上」付図。京極宏「森アイヌ頭蓋の人類学的研究」（『北大解剖研究報告』第99号、1958年7月）における発掘地に関する説明（2頁）と地図「第1図 出土地」（69頁）は小林覚一「森アイヌ歯牙の人類学的研究」と全く同じである。

- 107) 「アイヌ民族人骨発掘台帳」21頁。
- 108) 児玉作左衛門「アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷の研究」40～41頁。
- 109) 「アイヌ民族人体骨発掘台帳」96～98頁。
- 110) 『北大医学部五十年史』290頁。
- 111) 「アイヌ民族人体骨発掘台帳」94頁。
- 112) 児玉作左衛門「アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷の研究」45頁。
- 113) 渡辺左武郎「児玉先生の憶い出——戦前のアイヌ墳墓発掘のことなど」6頁。
- 114) 児玉作左衛門「ドクロとともに アイヌ研究の三十年」。
- 115) 児玉作左衛門「緊急を要したアイヌ研究——私のあゆんだ道」149～150頁。
- 116) 1937年8月19日付『東京朝日新聞』朝刊（北海樺太版）。「謎のクリル土人／北大児玉博士一行の調査隊／幾多貴重資料を携へて帰る」との見出しである。
- 117) 児玉作左衛門「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」31～39頁。
- 118) 児玉作左衛門「アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷の研究」78～79頁。
- 119) 「同上」44～45頁。
- 120) 児玉作左衛門『モヨロ貝塚』北海道原始文化研究会出版部、1948年、59・61頁。
- 121) 児玉作左衛門「アイヌの頭蓋学及骨学」、『人類学・先史学講座』雄山閣、1940年、1～79頁。この論文は、「アイヌの頭蓋学」（頭蓋計測、頭蓋観測、アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷）、「アイヌの骨学」（躯幹骨、上肢骨、下肢骨、四肢環状骨断面図）からなる。「アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷」は「アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷の研究」の要約、「アイヌの骨学」は先行研究の概略である。マルチン法については以下の文献を参照した。
 - ・鈴木尚『人体計測：マルチンによる計測法』人間と技術社、1973年
 - ・J. A. ローバック Jr. (大島正光、大久保克夫、江袋林蔵監訳)『人体計測マニュアル』朝倉書店、2003年
 - ・山口敏編・解説『昭和前期の研究者』（日本の人類学文献選集、近代篇第8巻）、クレス出版、2005年
- 122) 児玉作左衛門「アイヌの頭蓋学及骨学」29～31頁。
- 123) 「同上」31頁。
- 124) 榊原徳太郎「八雲アイノ古墳墓発掘随伴記」77頁。
- 125) 『特別及ビ小委員会ニヨル綜合研究ノ概要 第6回 15年度』191～193頁。
- 126) 『特別及ビ小委員会ニヨル綜合研究ノ概要 第1回』60頁。
- 127) Koganei Yoshikiyo, “Beiträge zur physischen Anthropologie der Aino. I. Untersuchungen am Skelet”, *Mitteilungen aus der Medicinischen Facultät der Kaiserlich Japanischen Universität*, Bd. 2, Nov.1894, pp.1-250. (小金井良精「アイノの形質人類学への貢献 I. 骨格計測」、『帝国大学紀要 医科 第二冊』1894年11月、1～250頁)。
- 128) 「アイヌ旧第8小委員会概要（昭和16年5月）」、『特別及ビ小委員会ニヨル綜合研究ノ概要 第6回 15年度』189頁。
- 129) 林春雄「日本學術振興會研究の現況」、『學術振興』第19号、1940年3月、1頁。
- 130) 「優性遺伝第26小委員会概要（昭和17年5月）」、日本學術振興會編・発行『特別及ビ小委員会ニヨル綜合研究ノ概要 第7回 16年度』1943年3月、421～423頁。
- 131) 高橋信吉他「アイヌの皮膚科的研究（第一回報告） 日高沙流並びに胆振鵡川地方のアイヌに於ける皮膚病並に性病に就て」、『民族衛生』第4巻5・6号、1935年12月、60頁。
- 132) 松野正彦、菅野吉一、兼重達男「日高アイヌ頭蓋における前頭・側頭骨連接について」（日本解剖学会第19回東北・北海道連合地方会講演抄録）、『解剖学雑誌』第48巻第6号、1973年12月、401～402

頁。

- 133) 医学部収蔵アイヌ人骨の照合調査で判明した、川合発掘のアイヌ人骨の寛骨については、〔巻末資料3〕「北海道帝国大学・北海道大学医学部解剖学第一講座・解剖学第二講座発掘アイヌ人骨一覧(2012年12月4日現在)」には、計上していない。〔巻末資料3〕は、頭蓋骨もしくは全身骨(頭部・上肢・体幹・下肢のうち二部位以上)を有する人骨から、一個体として特定できた人骨の一覧であるからである。複数個体の混在のため判別が困難な場合や、部位の接合部分が欠けている場合、一部位のみの場合などは、個体特定した人骨のいずれに所属するか否かの判別のため、照合調査が継続中である。
- 134) 「解剖学第一講座(記録)」1962年7月7日・7月23日・8月3日・8月17日・10月30日・11月8日、1963年5月1日・8月23日の条。
- 135) 北海道歯科医師会会史編纂実行委員会編『会史 北海道歯科医師会—100年のあゆみ—』北海道歯科医師会、1982年、669～674頁)によれば、佐々木裕寿は、1949・1951・1952、1966～1981年の間、日高歯科医師会会長であった。
- 佐々木裕寿は、松野正彦の指導下で、「川合アイヌ頭蓋における歯牙の形態学的研究」(『歯科学報』第73巻第3号、1973年3月)を著し、同論文で1973年7月9日に学位(歯学博士/東京歯科大学)を取得した(『歯科学報』第73巻第8号、1973年8月、1431～1433頁)。
- 136) 佐々木裕寿「川合アイヌ頭蓋における歯牙の形態学的研究」587～588頁。
- 137) 平川善祥「近世アイヌ墳墓の考古学的研究」、石附喜三男編『北海道の研究』第2巻考古編Ⅱ、清文堂出版、1984年、380頁。
- 138) 「同上」416・380頁。平川善祥は「豊畑墓地墳墓配置図」(382頁)も掲載している。
- 139) 平川善祥は、豊畑共同墓地は「昭和四十七年に改葬された」と述べている(「同上」416頁)。
- 140) 「旧豊畑墓地移転改葬工事平面図」(新ひだか町所蔵)。
- 141) 発掘人骨台帳の単頁複写物75頁では「長知内3」の性別は空欄だが、「日高アイヌ(大場利夫)計測表」《資料40》、大場利夫「日高アイヌ頭蓋の人類学的研究」(学位請求論文9頁)、大場利夫「日高アイヌ頭蓋の人類学的研究」(『北方文化研究』第7号、1974年3月、67頁)では、「女」と記載されている。「日高アイヌ(大場利夫)計測表」は、学位請求論文の執筆にあたり、大場利夫が計測数値を記入した計測表原本である。
- 142) 大場利夫・桐井力蔵「北海道岩内郡岩内遺跡」、『日本考古学年報』10(昭和32年度)、1963年、61頁。61頁には「北海道岩内遺跡出土アイヌ人骨」の写真を掲載している。岩内遺跡発掘調査は、大場利夫を「指導者」として、岩内町教育委員会が1956年9月28日～10月5日、1957年7月18日～26日に実施した(大場利夫「北海道岩内郡岩内遺跡」、『日本考古学年報』9(昭和31年度)、1961年、52頁、『日本考古学年報』10(昭和32年度)、61頁)。
- 143) 静内町史編纂委員会編『静内町史』静内町役場、1963年、85頁。
- 1956年7月18日付静内町長名北海道知事宛「墓地廃止許可申請書」(新ひだか町所蔵)には、「現墓地〔静内町共同墓地〕は当町字本町日高鉄道線静内駅附近にあって環境衛生上不適当であり都市計画による区画整理の対象個所であり近くこれが実施の運びになるので現墓地を廃止したい」とある。発信者は静内町長貝田信二である。
- 144) 中田幹雄「アイヌ墓地発掘について」、『北海道地方史研究』第22輯、1957年3月、48～52頁。
- 145) 齊藤庚八「静内アイヌ頭蓋における歯牙の硬組織変化」、『北大解剖研究報告』第157号、1960年2月、2～3頁。
- 146) 松野正彦・加藤三郎「静内アイヌ頭蓋における前頭・側頭骨連接について」、『北大解剖研究報告』第82号、1958年2月、1頁。
- 147) 「解剖学第一講座(記録)」の冒頭は1956年1月1日の条に始まり、「解剖学第一講座(記録)」と題してあるにもかかわらず、講座スタッフとして児玉作左衛門(解剖学第二講座教授)、松野正彦(同助

教授)、大場利夫(同講師)らの氏名を記載してある。記載内容も1960年までは、解剖学第二講座の事項である。表紙に「解剖学第一講座(記録)」と記してあるのは、1961年1月に松野正彦が解剖学第一講座教授に就いた際に、松野正彦が自身の記録として必要と考えて携行した「解剖学第二講座」の日誌に続けて、解剖学第一講座の日誌を記し、「解剖学第一講座(記録)」とタイトルを付したと考えられる。

- 148) 1984年、静内駅前共同墓地発掘人骨をアイヌ納骨堂におさめる際、解剖学第一講座は、発掘番号とは異なる整理番号を表示した四肢骨箱のまま、移送した。静内発掘No1～No166の整理リストの内容は、アイヌ納骨堂を管理する医学部事務部に引き継がれなかった。

また、静内発掘No1～No166の整理リストは2013年2月に確認されたため、〔巻末資料3〕「北海道帝国大学・北海道大学医学部解剖学第一講座・解剖学第二講座発掘アイヌ人骨一覧(2012年12月4日現在)」には、その内容が反映されていない。2013年3月現在、整理リスト《資料51》をもとにして、静内駅前共同墓地発掘人骨の照合調査が継続中である。

- 149) 「静内駅ウラの共同墓地盗掘について」、「対応(2)」392頁。
- 150) 西帯広郷土史編集委員会編・発行『西帯広郷土史』1980年、623～624頁。
- 151) 大場利夫「北海道千歳市キウス遺跡(第二次調査)」、『日本考古学年報』18(昭和40年度)、1970年4月、73・249頁。
- 152) 北海道大学医学部解剖学第二講座編・発行『江別市対雁樺太アイヌ共同墓地調査概要 昭和40年9月18日』(1965年)によった。『江別市対雁樺太アイヌ共同墓地調査概要 昭和40年9月18日』には編著者・発行所の記載はないが、調査担当者の伊藤昌一は解剖学第二講座教授であった。なお、頁の記載はない。発掘数は「アイヌ民族人体骨発掘台帳」によった。
- 153) 樺太アイヌ史研究会編『対雁の碑——樺太アイヌ強制移住の歴史』北海道出版企画センター、1992年、21～22頁。
- 154) 正しくは、解剖学第二講座。
- 155) 「北海道大学保管のアイヌ人骨イチャルパの開催に至るまでの経過報告」(北海道ウタリ協会「第1回 北海道大学保管のアイヌ人骨イチャルパ」1984年、医学部「アイヌ人骨問題経緯(昭59.4以降～ウタリ協会関係)」北海道大学医学部所蔵)。
- 156) 渡辺茂・河野本道編『平取町史』平取町、1974年、61頁。
- 157) 論文名は、〔巻末資料2〕「北海道帝国大学・北海道大学医学部解剖学第一講座・解剖学第二講座のアイヌ研究に関する学位論文一覧」を参照されたい。
- 158) 児玉作左衛門「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」1～2頁。
- 159) 児玉作左衛門「アイヌの体質」、『日本文化財』第15号、1956年7月、15～16頁。
- 160) 「同上」14～15頁。
- 161) 児玉作左衛門「アイヌの人種所属に関する諸説」、アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌』上、第一法規出版、1969年、153頁。
- 162) Sakuzaemon KODAMA, *AINU Historical and Anthropological Studies*, 北海道大学医学部、1970年、序文5頁。以下、和訳は引用者による。
- 163) 児玉作左衛門「緊急を要したアイヌ研究——私のあゆんだ道」150頁。
- 164) 児玉作左衛門「アイヌの頭蓋における人為的損傷」151頁。
- 165) 児玉作左衛門「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」37頁。
- 166) 同上。
- 167) 児玉作左衛門「アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷の研究」78～79頁。
- 168) *AINU Historical and Anthropological Studies*, pp.253-254.
- 169) ditto, pp.256-258.

- 170) ditto, p.257.
- 171) ditto, pp.258-259.
- 172) ditto, p.258.
- 173) 児玉作左衛門「アイヌ頭蓋に見られる損傷問題」、『北海道医学雑誌』第45巻第2号、1970年4月、46頁。
- 174) 同上。
- 175) 児玉作左衛門「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」37頁。
- 176) 児玉讓次「『アイヌ頭蓋にある切除痕の問題』に関する訂正」、『北海道の文化』第22号、1971年9月、44頁。
- 177) 「落成調書」、「医学部 建物 大正九年度」（事務局施設課「北海道大学所属国有財産沿革」、1956年、大学文書館所蔵）。
- 178) 『北大医学部五十年史』289頁。
- 179) 川田順『山海記』第一書房、1940年、181頁。川田順は池田芳郎の油彩画を有していた友人を介して、池田芳郎と知り合った（179～180頁）という。
- 「アイヌの髑髏」には、札幌に到着した6月4日の翌朝に北海道帝国大学を訪問したとあり（180頁）、末尾には「昭和十二年七月稿」（190頁）との記載もあるので、川田順が「K博士」に会ったのは1937年6月5日である。
- 180) 『同上』182～183頁。
- 181) 『同上』184・185・188頁。
- 182) 『北大医学部五十年史』289頁。
- 183) 1938年11月24日付起案原議「新宮建物並ニ工作物落成報告及引継ノ件」添付「落成調書（昭和十三年度）」、「国有財産調書（二）雑件 昭和十三年度」、事務局施設部所蔵）。
- 184) 1938年5月7日付『北海タイムス』。
- 185) 同上。
- 186) 「建物落成調書 昭和十三年度」、「北海道大学所属国有財産沿革」十二冊の内其四。
- 187) 「同上」290頁。
- 188) 1938年11月4日付『東京日日新聞』朝刊（北海道樺太版）。
- 189) 同上。
- 190) 「国有財産増減異動報告書」（「北海道大学所属国有財産沿革（増補）」10冊の内No3、1971年、1897頁、大学文書館所蔵）。
- 191) 解剖学第一講座の「日誌」の1968年12月の条には、「アルバイト学生2人本日より来室」（5日）、「コンテナ札通よりとどく 25個」（5日）、「大学のトラックで荷物運搬／アルバイト学生9名来室」（9日）、「“札通”で本格的引越し行おう……予定通り終了」（16日）、「第2解剖引越し」（18日）とある。
- 192) 「新築増築等建物配置図 No5（昭38～昭45）」、「北海道大学所属国有財産沿革（増補）」10冊の内No3、1922頁。
- 193) 医学部標本庫の解体時期を特定することはできなかった。
- 194) 井上芳郎の研究テーマは、『医学部解剖学第一講座：大正10年（1921年）～平成10年（1998年）大学院医学研究科脳科学専攻神経機能学講座分子解剖学：平成10年（1998年）～ 井上芳郎教授退職記念集：昭和53年（1978年）～平成18年（2006年）』16頁によった。
- 195) 児玉讓次の研究テーマは、『北大医学部九十年史』（医学部創立九〇周年記念実行委員会「北大医学部九十年史」刊行委員会編、北海道大学医学部、2011年、136・301頁）によった。
- 196) 武田充弘「北海道静内地区アイヌ頭蓋に関する人類学的研究 特に下顎骨を中心にして」は、1986年12月25日に博士号（医学博士）が授与された学位論文である。指導教授松野正彦の急死によって研究

が遅延し、井上芳郎が指導教授となって作成された。

- 197) 1983年7月7日「営繕工事要求書（医学部標本保存庫新鋭工事）」、「納骨堂（アイヌ人体骨）計画について S58～S59」個人所蔵。添付図面の該当する部屋毎に、「1解／頭ガイ骨（181体）／第5研究室」、「2解／頭ガイ骨（783体）／第4研究室」、「四肢骨 450箱」、「副葬品」と書き込みがある。
- 198) 1984年3月19日付施設部企画課工事司計宛医学部営繕掛「医学部アイヌ人体骨の現有数及び現況について（事務連絡）」添付資料、「納骨堂（アイヌ人体骨）計画について S58～S59」。
- 199) 北海道帝国大学編・発行『昭和七年八月十四日 澄宮殿下台覧品目録及解説』1932年、1・18頁。
- 200) 『同上』4～5頁、56～64頁。
- 201) 1932年8月15日付『小樽新聞』。マイクロ・フィルム版（附属図書館所蔵）によった。
- 202) 北海道帝国大学編・発行『澄宮殿下本学御成写真帖 昭和七年八月』1932年、5・7・28頁。
- 203) 『昭和七年八月十四日 澄宮殿下台覧品目録及解説』18頁。
- 204) 吉田仁吉編『釧路行幸誌』釧路市役所、1938年、27～29頁。巻頭グラビアには児玉作左衛門の肖像写真も載っている。北海道庁編・発行『昭和十一年陸軍特別大演習並地方行幸北海道庁記録』（1938年）には、「御進講」の記載はない。
- 205) 渡辺左武郎「児玉先生の憶い出——戦前のアイヌ墳墓発掘のことなど」4～5頁。
- 206) 渡辺左武郎「古稀を迎えて」、渡辺左武郎『そのまま』私家版、1981年、66～67頁。
- 207) 『釧路行幸誌』28～29頁。
- 208) 北海道帝国大学編・発行『行幸記念誌』1941年、65頁。
- 209) 『昭和十一年陸軍特別大演習並地方行幸北海道庁記録』5～7頁。
- 210) 『行幸記念誌』62～64頁。
- 211) 『同上』14・15・16・26頁。「単独拝謁者」は76人、「列立拝謁者」は145人であった。
- 212) 大野精七「医学部御行幸謹記」、『フラテ』第32号、1936年12月、1～2頁。
なお、『児玉作左衛門先生生誕百年記念誌』45頁に、「昭和11年10月 陸軍大演習の天皇陛下行幸に際し釧路にてアイヌ頭蓋について御前講演を行う児玉教授」とキャプションを付して載せてある写真は、昭和天皇が1936年10月8日に医学部天覧品を視察した際の撮影である。児玉作左衛門が釧路行在所において「御進講」を行ったのは1936年9月28日である。
- 213) 『行幸記念誌』29～33頁。
- 214) 北海道帝国大学編「行幸記念写真帖」1937年。写真帖には、「（アイヌ）ノ生体写真 教授山崎春雄」は「36 医学部天覧品 其ノ五」として、「（アイヌ）ノ頭蓋骨 教授児玉作左衛門」は「35 医学部天覧品 其ノ四」として貼付されている。
- 215) 北海道帝国大学編・発行『昭和十一年十月八日 天覧品目録及解説』1936年、38頁。
- 216) 大野精七「医学部御行幸謹記」10頁。
- 217) 『昭和十一年十月八日 天覧品目録及解説』37～38頁。
- 218) 「行幸記念写真帖」掲載写真のやや不鮮明な箇所は、『フラテ』第32号の表紙に載っている同じ頭蓋骨・説明板の写真を参照して確認した。
- 219) 『昭和十一年十月八日 天覧品目録及解説』37～38頁。
- 220) 『昭和十一年陸軍特別大演習並地方行幸北海道庁記録』345頁。
- 221) 『学術振興』第8号、1938年5月、1頁。
- 222) 1939年1月15日付『北大時報』4頁。
- 223) 1953年7月27日付『北海道新聞』（夕刊）。
- 224) 義宮来室写真は『写真集 医学部60年の歩み』北海道大学医学部同窓会、1983年、52頁に載っている。なお、同じ写真が児玉讓次編『児玉作左衛門先生生誕百年記念誌』52頁にも載っている。
- 225) 1954年9月1日付『北大時報』4頁。

- 226) 「解剖学第一講座（記録）」1954年8月22日の条。昭和天皇来室写真は『児玉作左衛門先生生誕百年記念誌』50～51頁に載っている。
- 227) 田辺信夫「良き研究室時代」、『児玉作左衛門先生生誕百年記念誌』113頁。
- 228) 「解剖学第一講座（記録）」1958年6月23日の条。皇太子来室写真は『写真集 北大医学部60年の歩み』56頁に載っている。なお、同じ写真が『児玉作左衛門先生生誕百年記念誌』52頁に載っている。
- 229) 1958年6月23日付『読売新聞』夕刊。
- 230) 池田隆政・厚子夫妻は、1954年8月17日から27日までの予定で北海道に滞在したが、北海道大学医学部標本庫を訪問した時日は不詳である。池田夫妻の行程は、1954年8月19日付『北海道新聞』夕刊、1954年8月21日付『北海道新聞』朝刊、1954年8月23日付『北海道新聞』朝刊、1954年8月23日付『読売新聞』朝刊を参照した。
- 池田夫妻が医学部標本庫を来室した際の写真は『児玉作左衛門先生生誕百年記念誌』52頁に載っている。
- 231) 千代の山が医学部標本庫を来室した際の写真は『児玉作左衛門先生生誕百年記念誌』76頁に載っている。
- 232) 1980年11月27日付北海道大学学長宛海馬沢博書簡（写）、1980年12月12日起案・12月16日決裁「北海道大学原議書 海馬沢博氏よりの書簡について」添付資料、北海道大学事務局総務企画部総務課「情報公開開示請求関係 平成20年度～」事務局所蔵。事務局所蔵文書はいずれも複写である（以下特に断らない）。
- 233) 1980年12月12日起案・12月16日決裁「北海道大学原議書 海馬沢博氏よりの書簡について」、「情報公開開示請求関係 平成20年度～」。
- 234) 「12月18日 事務局（庶務部長、庶務課長、同補佐、法規掛長）」、「対応（2）」481～482頁。メモランダムには「年」の記載がないが、1980年11月27日付海馬沢博書簡への対応策を検討したものであり、1980年に作成したと判断した。
- 235) 「学長と相談した結果」、「対応（2）」484頁。
- 236) 「アイヌ人骨発掘について 55.12.23」、「対応（2）」485頁。
- 237) 1980年12月12日付北海道大学学長宛海馬沢博書簡、1980年12月23日起案・同日決裁「北海道大学原議書 海馬沢博氏よりの督促書簡について」添付資料、「情報公開開示請求関係 平成20年度～」。
- 238) 1980年12月25日付海馬沢博宛北海道大学長今村成和書簡、1980年12月24日起案・12月25日決裁「北海道大学原議書 海馬沢博氏に対する返書について」添付資料、「情報公開開示請求関係 平成20年度～」。
- 239) 「56.1.26 〔事務局庶務部〕庶務課から調査依頼事項」、「対応（2）」480頁。
- 240) 「児玉譲次からの聴取記録」、「対応（2）」486頁。
- 241) 「児玉譲次ならびに大場利夫からの聴取記録」、「対応（2）」530頁。

「北方文化研究施設大場元教授からの事情聴取」にある「大場元教授は考古学が専門なので、アイヌ関係の研究は行っていない」との記述は、大場利夫は〔1〕「日高アイヌ頭蓋の人類学的研究」（『北方文化研究』第7号、1974年3月、65～220頁）、〔2〕「アイヌ大後頭孔の大きさ（面積）」（『北方文化研究』第8号、1975年3月、137～146頁）を発表しているので、事実とは相当に違背している。

〔1〕は、学位請求論文「日高アイヌ頭蓋の人類学的研究」（1955年3月医学博士号取得）と同文である。〔2〕は、学位請求論文の参考論文1「アイヌの大後頭孔の面積」と同文である。

なお、「大場利夫博士著作目録」（『北海道考古学』第9輯、1973年3月、5頁）には、〔1〕〔2〕をいずれも「（未公刊）」と断りを付して載せているが、それぞれ1974年と1975年に公刊をみたことは上記のとおりである。ところが、「大場利夫先生著作目録」（札幌学院大学考古学研究会大場利夫先生退職記念論文集刊行委員会編『文京台考古 特別号 大場利夫先生退職記念論文集』1985年3月、4～5頁）

には、[1][2]を載せていない。

- 242) 「海馬沢博氏の手紙に対する伊藤昌一名誉教授の説明」、「対応(2)」533～534頁。
- 243) 『北海道帝国大学医学部解剖学研究報告』・『北方文化研究報告』・『北大解剖研究報告』中のアイヌ関連論文の「リスト」、「アイヌ副葬品」、「アイヌ民族人骨発掘・研究・保存等に関する一覧」は、それぞれ「対応(2)」497～505頁・531頁・532頁。
- 244) R.T.Simmons, J.J.Graydon, N.M.Semple and S.Kodama, “A Collaborative Genetical Survey in AINU: HIDAKA, Island of HOKKAIDO”, *American Journal of Physical Anthoropology*, Vol.11, No.1, March 1953, pp.47-82.
- 245) 「56.1.30」(メモランダム)、「対応(2)」492頁。
- 246) 1981年12月21日付北海道大学学長宛付海馬沢博書簡、「情報公開開示請求関係 平成20年度～」。原議書は不詳である。
- 247) 1982年1月10日付北海道大学学長宛海馬沢博書簡、「情報公開開示請求関係 平成20年度～」。原議書は不詳である。
- 248) 1982年1月21日付海馬沢博宛北海道大学学長有江幹男書簡、「情報公開開示請求関係 平成20年度～」。原議書は不詳である。
- 249) 1982年2月3日付海馬沢博宛北海道大学医学部長三浦祐晶書簡、「情報公開開示請求関係 平成20年度～」。原議書は不詳である。
- 250) 1982年2月8日付北海道大学医学部長三浦祐晶宛海馬沢博書簡、「情報公開開示請求関係 平成20年度～」。原議書は不詳である。
- 251) 同上。
- 252) 「海馬沢氏よりの疑問点 (57.2.8手紙より)」、「対応(2)」453～454頁。
- 253) 1982年3月1日付海馬沢博宛北海道大学医学部長三浦祐晶書簡、「対応(2)」448頁。
- 254) 1982年3月5日付北海道大学医学部長三浦祐晶宛海馬沢博書簡、「対応(2)」456～457頁。
- 255) 1982年3月23日付海馬沢博宛北海道大学医学部長三浦祐晶書簡、「対応(2)」449頁。
- 256) 「海馬沢氏との面談概要(1982年4月8日)」、「対応(2)」441頁。
- 257) 1982年4月10日付北海道大学医学部事務長宛海馬沢博書簡、「対応(2)」442～443頁。
- 258) 1982年5月21日付北海道大学医学部事務長宛海馬沢博書簡、「対応(2)」439頁。
- 259) 1982年6月2日付海馬沢博宛北海道大学医学部事務長田中昭一書簡、「対応(2)」427頁。
- 260) 1982年6月15日付(消印)北海道大学医学部事務長宛海馬沢博書簡、「対応(2)」423～424頁。
- 261) 1982年6月8日付北海道大学学長有江幹男宛北海道ウタリ協会理事長野村義一「北海道大学におけるアイヌに係わる問題について」、「情報公開開示請求関係 平成20年度～」。
- 262) 「(57.6.10作成)／別紙ウタリ協会理事長よりの文書に対する学部長談」、「対応(1)」86頁。
- 263) ウタリ協会の申し入れ後、医学部と海馬沢博との間で以下のようなやり取りがあった。
- ①1982年6月15日付(消印)北海道大学医学部事務長宛海馬沢博書簡(「対応(2)」423～424頁)
 - ②1982年7月9日、海馬沢博と面談(「対応(2)」411～422頁)
 - ③1982年8月31日付北海道大学医学部長宛海馬沢博書簡(「対応(2)」406～407頁)
 - ④1982年10月11日付北海道大学医学部長宛海馬沢博書簡(「対応(2)」404頁)
 - ⑤1982年10月25日付海馬沢博宛北海道大学医学部事務長書簡(「対応(2)」402頁)
- 264) 「文部省における「アイヌ問題」の対談について 57.7.13」、「対応(1)」21頁。
- 265) 「(今後の研究)(57.8.16記)」、「対応(1)」3頁。井上芳郎・児玉譲次は、このときまでもその後もアイヌ人骨研究に携わっていないから、学部長の要請に応じて解剖学者としての見解を述べたものと考えられる。
- 266) 「57.12.17 ウタリ協会との話合い 15:00～16:00」、「対応(1)」33頁。

- 267) 「ウタリ協会との面談記録 医学部第三会議室 58. 1.24」,「対応 (1)」34～35頁。
- 268) 「ウタリ協会よりの設問 (58. 1.24 医学部第三会議室にて)」,「対応 (1)」64～65頁。
- 269) 小川隆吉は、1983年1月24日の北海道ウタリ協会の医学部視察について、「医学部動物実験室の四階に身体骨、頭骨が放置されていました。副葬品はありませんでした。頭骨そのものは、まさに、古新聞の一枚もなしに露出したものでした」と述べている（座談会「人骨研究にみる北大の侵略・植民地主義」『飛礫』11、1996年6月、17頁）。その後、北大文書開示研究会が主催したシンポジウム「さまよえる遺骨たち アイヌ墓地“発掘”の現在」（2011年6月10日）では、「当時の北海道ウタリ協会の指導者だった貝沢正さん、野村義一さん、杉村京子さん、佐藤幸雄さん、私といった面々が、医学部を訪ねて実態を視察することになりました。案内されたのは建物3階の「動物実験室」という部屋です。窓にはすべてカーテンがかけられ、入り口の右手に棚がありました。棚にはエゾオオカミの頭骨が6個、エゾシマフクロウの頭骨が6個。その隣に、動物たちの標本とまるで同じように、人間の頭骨が壁一面に並んでいたのです」（3頁）と述べている。
- 1983年当時もその後も、医学部解剖学第一講座・解剖学第二講座関連の「動物実験室」は存在しない。|医学部動物実験室の四階|、|3階の|動物実験室|は小川隆吉の記憶違いである。また、エゾオオカミ・シマフクロウの頭骨所蔵の事実はない。しかし、小川隆吉が「動物実験室」と記しているのは、哺乳動物頭蓋とアイヌ人骨と一緒に保管していた「基礎医学実験研究棟」3階の「研究室（中枢神経）」（第一解剖学第5研究室）である。そして、北海道ウタリ協会が保管状況を実見して「遺骨」と「標本」との懸隔は一気に顕現した。
- なお、北海道大学所蔵資料からは、医学部を視察した北海道ウタリ協会員を特定できなかった。
- 270) 「く事務局との話し合い 58. 3.30」,「対応 (1)」29頁。
- 271) 「事務局との打合せ 58. 4.18」,「対応 (1)」22頁。
- 272) 「1983年4月21日教授会メモ」,「教授会メモ 五十八年度」医学部所蔵。
- 273) 「アイヌ人体骨標本の保存問題について (58.4.21教授会学部長説明資料)」,「医学部教授会メモ 五十八年度」。
- 274) 「1983年4月21日医学部教授会議事録」,「昭和五十八年度 教授会議事録①」医学部所蔵。
- 275) 「文部省における「アイヌ問題」の対談概要」,「対応 (2)」335頁。
- 276) 「ウタリ協会との話し合い (概要)」,「対応 (1)」176～177頁。
- 277) 1983年5月12日医学部教授会報告事項「アイヌ人体骨標本の保存問題について」,「昭和五十八年度教授会議事録①」。
- 278) 「ウタリ協会との非公式懇談」,「対応 (1)」39～40頁。
- 279) 「アイヌ人体骨標本の保存問題について (教授会報告)」,「対応 (1)」178頁。
- 280) 1983年5月26日医学部教授会報告事項「アイヌ人体骨標本の保存問題について」,「昭和五十八年度教授会議事録①」。
- 281) 「医学部納骨堂（仮称）計画案に対するウタリ協会との話し合いについて」,「対応 (1)」76～81頁。
- 282) 「ウタリ協会との話し合い (1983年7月18日)」,「対応 (2)」356頁。
- 283) 「医学部納骨堂（案）計画案（一部修正）に対するウタリ協会との話し合いについて 昭和58年7月25日」,「対応 (1)」121頁。「ウタリ協会の主張（概要） 58. 7.25」（「対応 (1)」61頁）も参照した。
- 284) 「医学部納骨堂（仮称）計画案に対する事務局との打合せ 58. 7.29」,「対応 (1)」47頁。
- 285) 「医学部納骨堂（仮称）建設計画について 58. 8. 1」,「対応 (1)」48頁。
- 286) 「医学部納骨堂（仮称）建設計画に対するウタリ協会との対応について」,「対応 (1)」62～63頁。
- 287) 「北海道大学保管のアイヌ人骨イチャルパの開催に至るまでの経過報告」（ウタリ協会「第1回 北海道大学保管のアイヌ人骨イチャルパ」1984年、「アイヌ人骨問題経緯（昭59.4以降～ウタリ協会関

係)』)。

- 288) 1983年9月8日医学部教授会報告事項「アイヌ人体骨標本の保存問題について」、「昭和五十八年度教授会議事録②」医学部所蔵。
- 289) 「医学部納骨堂(仮称)計画案(一部修正)に対するウタリ協会との話し合いについて 昭和58年9月12日」、「対応(1)」55頁。
- 290) 1983年12月8日付『北海道新聞』(朝刊)。同紙は、海馬沢博が「北大のアイヌ研究のあり方を問い、謝罪させるという基本的な問題が解決されていない」、「研究の名の下に人間の尊厳を踏みにじってきた歴史の実例をあげる」と談話したと記した。しかし、紙面に「歴史の実例」を掲げてはいない。
- 291) 1983年12月8日医学部教授会報告事項「アイヌ人体骨標本の保存問題について」、「昭和五十八年度教授会議事録②」。
- 292) 「アイヌ人体骨保存に関するウタリ協会との話し合いについて 58.12.14」、「対応(1)」229～230頁。
- 293) 「アイヌ人骨イチャルパの費用に関するウタリ協会との対応について(文部省等の見解も含む。)(59.8.24)」、「対応(1)」208～209頁。一覧表に整理してある。
- 294) メモランダム「59.1.20 金 部長室」、「旧解剖学第二講座関係資料」個人蔵。児玉譲次の筆跡である。
- 295) 新聞は1983年以前に児玉作左衛門を讃えこそすれ、批判したことはなかった。例えば、1960年12月18日付『北海道新聞』(日曜版)は、「研究三十余年の成果／アイヌ標本室の児玉博士」と見出しを掲げ、「場所、男女別、年齢を記入して整然と並べられた頭ガイ骨……道内全域を歩いた成果だ」と報じ、紫綬褒章受章を讃えた。
- 296) 「アイヌ人体骨の保存に伴う慰霊祭の基金について(59.4.25)」、「アイヌ人骨問題経緯(昭59.4以降～ウタリ協会関係)」。
- この文書の欄外には「(4月25日開催の同窓会役員打合せ会学部長説明資料)」とある。
- 297) 「アイヌ人体骨の保存に伴う慰霊祭の基金について (59.6.7)」、「アイヌ人骨問題経緯(59.4以降～ウタリ協会関係)」。
- 欄外に「(学部長、事務長が学長、局長に対し説明の際の資料)」とある。
- 298) 「アイヌ人体骨を保存する標本保存庫(納骨堂)の設置及び供養祭に要する費用について(59.7.13)」、「アイヌ人骨問題経緯(59.4以降～ウタリ協会関係)」。
- 欄外に「局長、文部省ヒヤリングの際の資料として作成、高橋主計課補佐に提出」とある。「(59.7.13)」が医学部が事務局に提出した日か、事務局長が文部省に説明した日かは、にわかに判断することはできない。
- 299) 1984年7月28日付『北海道新聞』(朝刊)。
- 300) 北海道ウタリ協会「第1回 北海道大学保管のアイヌ人骨イチャルパ」、「アイヌ人骨問題経緯(昭59.4以降～ウタリ協会関係)」。
- 301) 「第1回アイヌ人骨イチャルパにおけるウタリ協会理事長の挨拶内容」、「対応(1)」193頁。医学部が録音記録を文章化したものである。
- ウタリ協会「北海道大学保管のアイヌ人骨イチャルパの開催に至るまでの経過報告」の第8項では、医学部と「10数回にわたり協議を重ねてきた結果、納骨堂の建設と、人骨の返還を希望する場合の返還について確認された」としか記していない。
- 302) 医学部が作成した1984年8月11日の録音(医学部所蔵)によった。聴取不能箇所は『北大百二十五年史 通説編』(2003年、543～544頁)で補正した。
- 303) 「北海道大学医学部保管のアイヌ人骨発掘内訳」は、〔1〕「アイヌ人骨問題経緯(昭和59・4以降～ウタリ協会関係)」、〔2〕『先駆者の集い』第37号、1984年10月15日、8頁(『アイヌ史 北海道ウタリ協会活動史編』北海道ウタリ協会編・発行、1994年、566頁)に、所載されている。
- 304) 「アイヌ民族人体骨発掘数一覧」、「対応(1)」182～184頁。

305) 『先駆者の集い』第37号、1984年10月15日、7～8頁。『アイヌ史 北海道アイヌ協会活動史編』(565～566頁)によった。

306) 「北大アイヌ納骨堂・慰霊祭募金趣意書」、「対応(1)」223～224頁。発起人を募る趣意書は1984年5月付、寄附を募る趣意書は1984年6月付である。解剖学第一講座・解剖学第二講座出身者それぞれ45人・81人に、70万円を目標に寄附を依頼した。1983年5月26日の医学部教授会において、学部長が「解剖学関係講座を中心に本学部教官有志に対して寄付依頼の方策等を講ぜざるを得ない」と述べていたことは先述した。経緯は不詳だが、「本学部教官有志」から「解剖学関係講座」関係者に限定して寄附を募ったのである。116人が寄せた募金は合計177万円に達した(「北大アイヌ納骨堂慰霊祭募金会計報告」、「対応(2)」298頁)。

発起人代表を務めた渡辺左武郎は、1980年に札幌医科大学長を退き1982年から北海道開拓の村理事長であった(渡辺左武郎『続 そのまま』私家版、1994年、298～299頁)。

趣意書には、寄附金を募らなければならない事情を、「新聞その他で報道」、「北大医学部解剖学教室の現教室員ならびに教室出身者の御支援により調達致さなければならない現状」と記すのみであった。

1985年5月14日付『北海道新聞』(朝刊)は、第1回供養祭は「〔医〕学部内の募金七十万円と道からの五十万円の計百二十万円で行われた」と記している。

307) 「1984年9月13日教授会メモ」、「教授会メモ 昭59年」医学部所蔵。

308) 1984年8月23日付北海道大学医学部長宛北海道ウタリ協会理事長申入書「北海道大学保管のアイヌ人骨イチャルパ執行経費に係る負担について」、「対応(1)」203頁。

309) 「アイヌ人骨に関するウタリ協会との対応 昭和60年5月13日」、「対応(2)」290頁。欄外に「対応記録」と書込がある。

310) 「第2回供養祭執行経費に関するウタリ協会との対応 昭和60年6月24日」、「対応(2)」306頁。

311) 『北大医学部同窓会新聞』第62号、1985年9月10日。

312) 「アイヌ人骨供養祭基金募金趣意書」、「アイヌ人骨供養祭基金募金関係書類」医学部所蔵。

313) 『北大医学部同窓会新聞』第62号、1985年9月10日。

314) 「アイヌ人骨供養祭基金に関するウタリ協会との対応 昭和62年3月23日」、「アイヌ人骨問題経緯(59.4以降～ウタリ協会関係)」。

315) 「「北大アイヌ人骨供養祭基金」について」、1988年8月4日「確認書」添付資料、「供養祭基金確認書(63.8.4)」医学部所蔵。

316) 1988年9月12日付「寄付者各位」、「アイヌ人骨供養祭基金募金関係書類」。差出人は「アイヌ人骨供養祭基金募金実行委員会委員長 相沢幹」である。

317) 「アイヌ人骨供養祭基金受入内訳書 昭和63年8月31日現在」、「アイヌ人骨供養祭基金募金関係書類」。医学部同窓生1,342人から16,519,600円、医学部教職員7人から80,000円、企業19社から7,447,000円、公立病院等4院から40,000円、篤志家8人から120,000円の募金があった。

318) 1988年8月4日「確認書」、「供養祭基金確認書(63.8.4)」。

1988年8月12日、第5回供養祭でウタリ協会が配付した「第5回北海道大学保管のアイヌ人骨イチャルパ」(「イチャルパ関係書類」医学部所蔵)中の「北海道大学保管のアイヌ人骨に係る経過報告」(5～6頁)には、北海道大学医学部保管のアイヌ人骨の供養祭基金に関する「確認書」について、以下のような記述がある。

23 昭和63年3月9日・6月29日の2回にわたり北大医学部長(広重氏)と「アイヌ人骨供養祭執行基金」(仮称)の創設にかかる協議を行った。

①基金は、2,100万円とする。

②63年度イチャルパ執行にかかる経費については、前年同様100万円とする。

なお、同上内容で昭和63年度当協会定期総会の決定をみ、8月4日北大医学部と確認書を交わし

た。

『先駆者の集い』第47号（1988年10月22日、15～16頁。『アイヌ史 北海道アイヌ協会活動史編』671～672頁所載）は、基金創設の内容は「五月八日の昭和六十三年度当協会定期総会にて決定をみ、八月四日に北大医学部との間で左記のとおり確認書を交わしました」と述べ、北海道大学医学部保管のアイヌ人骨の供養祭基金に関する「確認書」の全文を載せている。

なお、医学部には1988年6月29日の協議の記録は見当たらない。

319) 「「北大アイヌ人骨供養祭基金」について」、1988年8月4日「確認書」添付資料、「供養祭基金確認書（63. 8. 4）」。

320) 「覚書」、1988年8月4日「確認書」添付資料、「供養祭基金確認書（63. 8. 4）」。

321) 『北大医学部同窓会新聞』第71号、1988年9月20日。

322) 1985年7月22日付北海道大学医学部長宛北海道ウタリ協会旭川支部支部長川村兼一・旭川アイヌ協議会長川上実連名「アイヌ人骨返還要請書」、「対応（2）」286頁。1985年7月29日付北海道大学医学部長宛北海道ウタリ協会理事長野村義一「アイヌ人骨返還に係る要請について」（「対応（2）」285頁）、1985年8月8日付『北海道新聞』朝刊も参照した。

323) 1985年8月9日付北海道大学医学部長宛北海道ウタリ協会理事長野村義一「アイヌ人骨返還に係る要請について」、「対応（2）」313頁。この通知には日付のないウタリ協会本部宛ウタリ協会釧路支部長武利誠「釧路市アイヌ人骨引取りについて」（「対応（2）」315頁）を添付してある。なお、「アイヌ人骨（釧路地区関係）返還経緯」（「対応（2）」268頁、余白に「（事務局へ報告）」と書込みがある。作成者・作成日は記載がない）も参照した。

324) 「アイヌ人骨（釧路地区関係）返還経緯」。医学部の応答は記録されていない。

325) 1987年11月16日付北海道大学医学部長宛北海道ウタリ協会理事長野村義一「アイヌ人骨返還に係る要請について」（複写）、「旧解剖学第二講座関係資料」。

帯広市柏林台生活館周辺地図、「1987年11月9日付社団法人北海道ウタリ協会理事長野村義一宛帯広支部長笹村二郎「返還要請書」、理事長野村義一宛納骨式・法要祭（1987年12月2日）「御案内」を添付してある。いずれも複写である。医学部参列者に関する記録はない。

326) 1995年7月25日付北海道大学医学部起案原議書「アイヌ人骨（頭蓋骨）の返還について」（複写）、「旧解剖学第二講座関係資料」。

備考欄に「本件人骨（三石関係分三石1）の返還については平成7年8月8日解剖学第二講座児玉教授が三石へ出向き引渡しの予定である」とある。

ウタリ協会からの返還要請書は見当たらない。

327) 2001年8月27日付北海道ウタリ協会理事長宛北海道ウタリ協会門別支部支部長名要請文「北海道大学医学部敷地内アイヌ納骨堂安置遺骨の引き取りについて」、2001年8月28日付北海道大学医学部長宛北海道ウタリ協会理事長要請文「アイヌ納骨堂安置遺骨の引き取りについて」、永島雅文「アイヌ納骨堂安置遺骨の社団法人北海道ウタリ協会門別支部への引き渡し経緯」（2001年9月13日記）。いずれも「旧解剖学第二講座関係資料」。

328) 1985年8月3日「アイヌ頭蓋又は頭蓋骨について」、「対応（2）」287頁。末尾に「北大医学部解剖学第2講座 児玉譲次」とある。なお、解剖学用語として、「頭蓋」は頭部の骨格すべてが揃っていることを表し、「頭蓋骨」は頭部の骨格の一部を意味する。

329) 「釧路 アイヌ頭蓋 報告書 昭和60年8月26日(月)」、「対応（2）」271頁。

330) 『北大医学部九十年史』301～303頁。

331) 『同上』135～136頁。

332) 「「アイヌ民族遺骨300体超北大ずさん管理」の報道について 平成14. 8. 5」、「旧解剖学第二講座関係資料」。

- 333) 2002年8月3日付『北海道新聞』(夕刊)。
- 334) 「アイヌ民族遺骨300体超北大ずさん管理」の報道について 平成14. 8. 5」。
- 335) 医学部解剖学講座・解剖発生学分野の渡辺雅彦教授からの聞き取り調査(2011年10月11日)。
- 336) 事務局総務企画部企画調整課「アイヌ人骨保存処理関係業務等の経緯」(2013年1月24日)。企画調整課が作成した手控メモランダムである。
- 337) 2002年10月28日付北海道大学大学院医学研究科長西信三宛北海道ウタリ協会理事長秋田春蔵「北海道大学アイヌ納骨堂について」、2006年7月26日付北海道大学医学研究科庶務係宛北海道ウタリ協会「ファックス」添付資料(複写)、医学部所蔵。
- 338) 2006年7月26日付北海道大学医学研究科庶務係宛北海道ウタリ協会「ファックス」(複写)、医学部所蔵。
- 339) 医学部「アイヌ遺骨情報提供関係(情報開示)関係経緯」2008年3月、医学部所蔵。

〔巻末資料1〕 北海道帝国大学・北海道大学医学部解剖学第一講座・解剖学第二講座のアイヌ研究論文一覧

No	論文名
1	平光吾一「所謂千島アイヌ族の現状と同種血球凝集反応に就て」、『人類学雑誌』第43巻第12号、1928年12月
2	平光吾一「千島及び弁天島出土土器破片に就て（一）」、『人類学雑誌』第44巻第4号、1929年4月
3	平光吾一「千島及び弁天島出土土器破片に就て（二）」、『人類学雑誌』第44巻第5号、1929年5月
4	平光吾一（北海道帝大）「「アイヌ」人体質ノ研究 其1（頭頸）」（第37回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第2巻第2号、1929年6月
5	佐野好（北海道帝大）「「アイヌ」人体質ノ研究 其2（上肢）」（第37回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第2巻第2号、1929年6月
6	椎名順二（北海道帝大）「「アイヌ」人体質ノ研究 其3（下肢）」（第37回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第2巻第2号、1929年6月
7	新藤省三（北海道帝大）「「アイヌ」人体質ノ研究 其4（背部）」（第37回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第2巻第2号、1929年6月
8	中野曄二（北海道帝大）「「アイヌ」人体質ノ研究 其5（内臓ニ就イテ）」（第37回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第2巻第2号、1929年6月
9	平光吾一「千島及び弁天島出土土器破片に就て（三）」、『人類学雑誌』第44巻第7号、1929年7月
10	平光吾一「アイヌ人同種血球凝集反応と海馬注口土器発見の価値」、『人類学雑誌』第44巻第12号、1929年12月
11	平光吾一「アイヌ人に関する二三の知見」（日本学術協会第5回大会学術講演）、『日本学術協会報告』第5巻、1930年
12	平光吾一「アイヌ人体質の研究（其一）」、『人類学雑誌』第45巻第1号、1930年1月*
13	平光吾一「アイヌ彫刻「イトッパ」の土器表面文様としての存在に就いて」、『人類学雑誌』第45巻第2号、1930年2月
14	新藤省三「「アイヌ」人体質ノ研究（其ノ三）「アイヌ」人ノ背筋、深部頸筋、脊髓及び脊柱ニ就テ」、『北海道医学雑誌』第8年第3号、1930年3月*
15	新藤省三「「アイヌ」人体質ノ研究（其ノ三）「アイヌ」人ノ背筋、深部頸筋、脊髓及び脊柱ニ就テ」、『北海道医学雑誌』第8年第4号、1930年4月*
16	平光吾一「アイヌ人体質の研究（其二）アイヌ人に於ける甲状腺挙筋に就て」、『人類学雑誌』第45巻第4号、1930年4月
17	新藤省三「深部頸筋ト側部軀幹筋トノ関係ニ就イテ」（解剖学教室同窓会第5回例会講演要旨）、『九大医報』第4巻第2号、1930年4月
18	椎名順二「上孖筋ト尾閭筋トノ結合セル二例」（解剖学教室同窓会第6回例会講演要旨）、『九大医報』第4巻第2号、1930年4月
19	平光吾一「色丹島茶談」、『九大医報』第4巻第2号、1930年4月
20	平光吾一「イトクバ問題に就き」、『人類学雑誌』第45巻第5号、1930年5月
21	平光吾一「余の用ひたるイトッパの用語に関する補遺」、『人類学雑誌』第45巻第6号、1930年6月
22	平光吾一「「アイヌ」人ノ体理学的觀察（予報）」（第38回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第3巻第3号、1930年6月
23	椎名順二「「アイヌ」人ノ下肢筋ニ就テ」（第38回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第3巻第3号、1930年6月
24	佐野好「「アイヌ」人及び日本人ノ長拇外転筋（M. abductor pollicis longus）」（解剖学教室同窓会第8回例会講演要旨）、『九大医報』第4巻第3号、1930年6月
25	佐野好「「アイヌ」及び日本人深指屈筋副束ニ就テ」（解剖学教室同窓会第9回例会講演要旨）、『九大医報』第4巻第4号、1930年8月
26	平光吾一「アイヌ人頸部諸筋ニ関スル知見」（解剖学教室同窓会第9回例会講演要旨）、『九大医報』第4巻第4号、1930年8月
27	椎名順二「「アイヌ」人膝関節ニ就テノ二三ノ觀察」（解剖学教室同窓会第9回例会講演要旨）、『九大医報』第4巻第4号、1930年8月
28	佐野好「アイヌ人体質の研究（其の五）アイヌ人肋骨異常分岐の一例」、『人類学雑誌』第45巻第9号、1930年9月

No	論文名
30	椎名順二「アイヌ人体質の研究（其の八）アイヌ人膝関節に就ての二三の観察」、『人類学雑誌』第45巻第11号、1930年11月
31	佐野好「「アイヌ」人体質ノ研究（其七）「アイヌ」人上肢皮下静脈ニ就テ」、『解剖学雑誌』第3巻第9号、1930年12月
32	佐野好「アイヌ人体質の研究（其の九）アイヌ人及び日本人の深指屈筋副束に就て」、『人類学雑誌』第45巻第12号、1930年12月
33	椎名順二「「アイヌ」人体質ノ研究（其十）「アイヌ」人下肢皮下静脈ニ就テ」、『解剖学雑誌』第3巻第9号、1930年12月
34	佐野好「「アイヌ」人体質ノ研究 其ノ十一「アイヌ」人ノ上肢筋ニ就テ」、『福岡医科大学雑誌』第24巻第1号、1931年1月*
35	椎名順二「「アイヌ」人体質ノ研究 其ノ十二「アイヌ」人ノ下肢筋ニ就テ」、『福岡医科大学雑誌』第24巻第4号、1931年4月
36	平光吾一、椎名順二「北海道神居村台場に見出されたる石塊面の不明彫刻に就いて」、『人類学雑誌』第47巻第1号、1932年1月
37	中野曄「「アイヌ」人体質ノ研究「アイヌ」人内臓ノ肉眼的精査」、『北海道医学雑誌』第10年第3号、1932年3月*
38	平光吾一「アイヌ人体質の研究（其の十四）アイヌ人二腹顎筋の破格に就いて」、『人類学雑誌』第47巻第7号、1932年7月
39	久木田重雄「「アイヌ」人舌ノ輪郭乳頭ニ就テ」（第40回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第5巻第7号、1932年10月
40	平光吾一、久木田重雄「「アイヌ」人下顎歯列後端Trigonum retromolareニ見タル一口腔腺ノ供覧」（第40回日本解剖学会集会における標本供覧）、『解剖学雑誌』第5巻第7号、1932年10月
41	中野曄「「アイヌ」人体質ノ研究（其ノ四）「アイヌ」人内臓ノ肉眼的精査（第二篇）」、『北海道医学雑誌』第10年第12号、1932年12月*
42	中野曄「「アイヌ」人体質ノ研究（其ノ五）「アイヌ」人内臓ノ肉眼的精査（第二篇）」、『北海道医学雑誌』第10年第12号、1932年12月*
43	中野曄「「アイヌ」人体質ノ研究（其ノ六）「アイヌ」人内臓ノ肉眼的精査（第二篇）」、『北海道医学雑誌』第10年第12号、1932年12月*
44	中野曄「「アイヌ」人体質ノ研究（其ノ七）「アイヌ」人内臓ノ肉眼的精査（第二篇）」、『北海道医学雑誌』第10年第12号、1932年12月*
45	久木田重雄「「アイヌ」人体質ノ研究 其ノ十五 「アイヌ」人舌ノ輪郭乳頭ニ就テ」、『福岡医科大学雑誌』第25巻第12号、1932年12月
46	中野曄「「アイヌ」人体質ノ研究（其ノ八）「アイヌ」人内臓ノ肉眼的精査（第二篇）」、『北海道医学雑誌』第11年第1号、1933年1月*
47	中野曄「「アイヌ」人体質ノ研究（其ノ九）「アイヌ」人内臓ノ肉眼的精査（第二篇）」、『北海道医学雑誌』第11年第1号、1933年1月*
48	野村愛介「千島「アイヌ」人ノ乳歯残存ノ一例」（北海道医学会第12回大会講演抄録）、『北海道医学雑誌』第12年第7号、1934年7月
49	野村愛介「齶ノ齶歯」、『北海道医学雑誌』第12年第9号、1934年9月
50	野村愛介、児玉作左衛門「八雲アイヌ人頭骨に於ける齶歯」（日本民族衛生学会第4回学術大会講演抄録）、『民族衛生』第4巻第3・4号、1935年7月
51	野村愛介、児玉作左衛門「八雲アイヌ人頭骨に於ける齶歯に就いて」、『民族衛生』第4巻第3・4号、1935年7月
52	岡田正夫「人類学的写真ノ撮影法ニ就テ」（第43回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第8巻第7号、1935年10月
53	榊原徳太郎「「アイヌ」人頭骨ノ口蓋隆起ニ就テ」（第43回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第8巻第7号、1935年10月
54	岡田正夫「アイヌの指紋掌紋の研究 第一報 沙流地方アイヌ指紋に就て」、『民族衛生』第4巻第5・6号、1935年12月
55	山崎春雄「旭川市近文「アイヌ」部落ニ於ケル「アイヌ」人ノ生体測定」、『日本聯合衛生学会々誌』第8巻、1936年7月

No	論文名
56	児玉作左衛門「北海道渡島国森町並びに落部に於けるアイヌ墳墓遺跡発掘」、『日本聯合衛生学会会誌』 8、1936年 7 月
57	鹽田勲「「アイヌ」人手骨ニ就テ」(第44回日本解剖学会集会演説抄録)、『解剖学雑誌』 第 9 卷第 5 号、1936年 8 月
58	半澤信一「「アイヌ」人頭骨ノ傍髁状突起ニ就テ」(第44回日本解剖学会集会演説抄録)、『解剖学雑誌』 第 9 卷第 5 号、1936年 8 月
59	榊原徳太郎「人及ビ哺乳動物頭骨ノ「プレグマ」結合ニ就テ」(第44回日本解剖学会集会演説抄録)、『解剖学雑誌』 第 9 卷第 5 号、1936年 8 月
60	児玉作左衛門「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』 第 1 輯、1936年11月
61	渡辺左武郎「八雲アイヌ頭蓋骨の所謂第三後頭髁に就て」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』 第 1 輯、1936年11月
62	榊原徳太郎「八雲アイヌ頭蓋骨の口蓋隆起に就て」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』 第 1 輯、1936年11月
63	半澤信一「八雲アイヌ頭蓋骨の傍髁状突起に就て」『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』 第 1 輯、1936年11月
64	伊藤昌一「八雲アイヌの埋葬法」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』 第 1 輯、1936年11月
65	山崎春雄「アイヌ人写真生体測定に関する報告」(日本民族衛生協会第 5 回学術大会報告抄録)、『民族衛生』 第 5 卷第 5 号、1936年12月
66	野村愛介「北海道アイヌ頭蓋骨に於ける齲歯に就て」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』 第 2 輯、1936年12月
67	野村愛介「アイヌ頭蓋骨下顎犬歯根の分岐例に就て」『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』 第 2 輯、1936年12月
68	野村愛介「千島アイヌの乳歯残存の一例」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』 第 2 輯、1936年12月
69	伊藤昌一「八雲アイヌ頭蓋骨大臼歯の歯冠結節組列に就て」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』 第 2 輯、1936年12月
70	山崎春雄「「アイヌ」人容貌ノ人類学的觀察」(第45回日本解剖学会総会講演抄録)、『解剖学雑誌』 第10巻第 3 号、1937年 6 月
71	鹽田勲「「アイヌ」人ノ足骨ニ就テ」(第45回日本解剖学会総会特別講演抄録)、『解剖学雑誌』 第10巻第 3 号、1937年 6 月
72	渡辺左武郎「「アイヌ」頭蓋骨ノ研究 其ノ一 八雲「アイヌ」頭蓋骨」(第45回日本解剖学会総会特別講演抄録)、『解剖学雑誌』 第10巻第 3 号、1937年 6 月
73	榊原徳太郎「「アイヌ」頭蓋骨ノ研究 其ノ二 落部「アイヌ」頭蓋骨」(第45回日本解剖学会総会特別講演抄録)、『解剖学雑誌』 第10巻第 3 号、1937年 6 月
74	半澤信一「「アイヌ」頭蓋骨ノ研究 其ノ三 浦幌(十勝)「アイヌ」頭蓋骨」(第45回日本解剖学会総会特別講演抄録)、『解剖学雑誌』 第10巻第 3 号、1937年 6 月
75	伊藤昌一「「アイヌ」頭蓋骨ノ研究 其ノ四「アイヌ」頭蓋骨ノ側頭鱗」(第45回日本解剖学会総会特別講演抄録)、『解剖学雑誌』 第10巻第 3 号、1937年 6 月
76	児玉作左衛門「「アイヌ」頭蓋骨ノ研究 其ノ五「アイヌ」頭蓋骨ノ諸種ノ發育異常」(第45回日本解剖学会総会特別講演抄録)、『解剖学雑誌』 第10巻第 3 号、1937年 6 月
77	児玉作左衛門「「アイヌ」頭蓋骨ノ大後頭孔毀損問題(幻燈)」(第15回北海道医学会記念大会講演抄録)、『北海道医学雑誌』 第十五号、1937年10月
78	山崎春雄「「アイヌ」人容貌の人類学的觀察」(第 2 回東京人類学会日本民族学会連合大会特殊課題講演抄録)、『東京人類学会連合大会第二回紀事』、1937年10月
79	児玉作左衛門「アイヌの頭蓋骨に就いて」(第 2 回東京人類学会日本民族学会連合大会特殊課題講演抄録)、『東京人類学会連合大会第二回紀事』 1937年10月
80	森本賢市「樺太アイヌ頭蓋骨に於ける齲歯」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』 第 5 輯、1938年 5 月
81	寺沼政雄「アイヌ頭蓋骨の眼窩上縁に於ける孔並に切痕に就て」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』 第 5 輯、1938年 5 月

No	論文名
82	寺沼政雄「アイヌ頭蓋骨下眼窩孔に就て」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第5輯、1938年5月
83	寺沼政雄「アイヌ頭蓋骨の滑車棘に就て」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第5輯、1938年5月
84	杉本是正「アイヌ頭蓋骨巨大歯の一例に就て」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第5輯、1938年5月
85	奥田正治「中部北海道兵員の人類的調査 附アイヌの体質人類学的研究補遺」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第5輯、1938年5月
86	榊原徳太郎「口蓋縫合の結合状態に就て」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第5輯、1938年5月
87	児玉作左衛門「アイヌ民族に於ける妊婦屍体解剖の奇習」、『北海警友』[号不明]、1938年6月
88	岡田正夫「[アイヌ]ノ手骨計測」(第46回日本解剖学会総会演説抄録)、『解剖学雑誌』第12巻第2号、1938年7月
89	毛利悌雄・堀内利罔「[ギリヤーク]、[オロツコ]ノ手骨計測」(第46回日本解剖学会総会演説抄録)、『解剖学雑誌』第12巻第2号、1938年7月
90	鹽田勲「[アイヌ]人脊柱ノ容積計測」(第46回日本解剖学会総会演説抄録)、『解剖学雑誌』第12巻第2号、1938年7月
91	伊藤昌一「[アイヌ]ノ載域ノ發育異常ニ就イテ」(第46回日本解剖学会総会演説抄録)、『解剖学雑誌』第12巻第2号、1938年7月
92	渡辺左武郎「八雲[アイヌ]脳頭蓋ノ輪郭ニ就イテ」(第46回日本解剖学会総会演説抄録)、『解剖学雑誌』第12巻第2号、1938年7月
93	榊原徳太郎「日本人脳頭蓋ノ容積ニ就テ」(第46回日本解剖学会総会演説抄録)、『解剖学雑誌』第12巻第2号、1938年7月
94	半澤信一「[アイヌ]ノ下顎隆起ニ就イテ」(第46回日本解剖学会総会演説抄録)、『解剖学雑誌』第12巻第2号、1938年7月
95	半澤信一「アイヌ頭蓋骨に於ける傍髁状突起の特殊例」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第6輯、1938年8月
96	児玉作左衛門述「[アイヌ]民族に就て」(第28回関東北医師大会特別講演)、1938年10月
97	児玉作左衛門、伊藤昌一「占守島出土の千島アイヌ頭蓋骨の人類的研究」(東京人類学会日本民族学会連合大会第3回講演)、『普救人類学会連合大会第三回紀事』1938年11月
98	Saburo Watanabe, "Kraniologie der Yakumo-Aino", Sonderabdruck von <i>Crania Ainoica</i> , Dec. 1938.
99	児玉作左衛門「アイヌ民族に就いて」、『北海道樺太衛生』第5巻第2号、1939年2月
100	児玉作左衛門「アイヌ民族に就いて」、『北海道樺太衛生』第5巻第3号、1939年3月
101	児玉作左衛門「アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷の研究」、『北方文化研究報告』第1輯、1939年3月
102	濱凱「アイヌ聴小骨の人類的研究」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第7輯、1939年4月
103	濱凱「アイヌ鎧骨の形状に就て」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第7輯、1939年4月
104	杉本是正「日本人頭蓋骨の瑤瑯真珠に就て」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第7輯、1939年4月
105	伊藤昌一「[アイヌ]頭蓋骨梨子状孔下縁ノ形態ニ就イテ」(第47回日本解剖学会総会演説抄録)、『解剖学雑誌』第14巻第2号、1939年7月
106	児玉作左衛門、伊藤昌一「アイヌの文身の研究」、『北方文化研究報告』第2輯、1939年10月
107	森本賢市「樺太アイヌ頭蓋骨に於ける歯牙の研究」、『北大医学部解剖学教室研究報告』第8輯、1939年10月
108	森本賢市「千島アイヌ頭蓋骨に於ける歯牙の研究」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第8輯、1939年10月
109	児玉作左衛門、伊藤昌一「アイヌの文身に就て」(第4回東京人類学会日本民族学会連合大会講演)、『普救人類学会連合大会第四回紀事』1939年11月
110	児玉作左衛門、伊藤昌一「樺太アイヌ文身の研究」、『北方文化研究報告』第3輯、1940年5月

No	論文名
111	児玉作左衛門「千島アイヌ」、『南千島色丹島誌』（アチックミュージアム彙報第47）、1940年7月
112	児玉作左衛門「アイヌの頭蓋学及骨学」、『人類学・先史学講座』第18巻、雄山閣、1940年11月
113	Tokutaro Sakakibara, “Kraniologie der Otoshibe-Aino”, Sonderabdruck von <i>Crania Ainoica</i> , Nov. 1940.
114	岡田正夫「「アイヌ」容貌ノ研究」（第48回日本解剖学会総会演説抄録）、『解剖学雑誌』第16巻第6号、1940年12月
115	堀内利罔「「アイヌ」ノ臑骨ニ就テ」（第48回日本解剖学会総会演説抄録）、『解剖学雑誌』第16巻第6号、1940年12月
116	毛利悌雄「「アイヌ」掌紋ノ研究」（第48回日本解剖学会総会演説抄録）、『解剖学雑誌』第16巻第6号、1940年12月
117	児玉作左衛門「デ・アンジェリスの蝦夷国報告書に就て」、『北方文化研究報告』第4輯、1941年2月
118	鹽田勲「アイヌ手骨の人類学的研究」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第9輯、1941年4月
119	鹽田勲「アイヌ人脊柱の計量について」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第9輯、1941年4月
120	伊藤昌一「アイヌ頭蓋骨梨状口下縁の形態に就いて」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第9輯、1941年4月
121	伊藤昌一「アイヌ頭蓋骨に於ける前頭・側頭骨連接に就いて」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第9輯、1941年4月
122	寺沼政雄「北海道アイヌ前頭骨の人類学的研究」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第9輯、1941年4月
123	児玉作左衛門、伊藤昌一「アイヌ髪容の研究」、『北方文化研究報告』第5輯、1941年7月
124	児玉作左衛門「外国文献に現はれたる初期の北海道」、『北海道文化史考』、1942年2月
125	Okada Masao, “Über die Gesichtszüge der Aino”, <i>Japanese Journal of Medical Sciences, Part I Anatomy</i> , Vol. 9, Sept. 1942. (『日本医学輯報 第一部門 解剖学 原著及抄録』第9巻、1942年9月、「解剖学会報 抄録」)
126	Horiuti Tosikuni, “Untersuchungen über das Hüftbein der Aino”, <i>Japanese Journal of Medical Sciences, Part I Anatomy</i> , Vol. 9, Sept. 1942. (『日本医学輯報 第一部門 解剖学 原著及抄録』第9巻、1942年9月、「解剖学会報 抄録」)
127	Mori Yasuo, “Untersuchungen über die palmaren Leistenbilder von Aino”, <i>Japanese Journal of Medical Sciences, Part I Anatomy</i> , Vol. 9, Sept. 1942. (『日本医学輯報 第一部門 解剖学 原著及抄録』第9巻、1942年9月、「解剖学会報 抄録」)
128	児玉作左衛門、伊藤昌一「アイヌ髪容の研究補遺」、『北方文化研究報告』第6輯、1942年9月
129	杉本是止「アイヌ頭蓋骨の歯牙に於ける珐瑯真珠の研究」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第10輯、1942年11月
130	伊藤昌一「北海道アイヌ頭蓋骨側頭鱗の大きさ・形状及位置」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第10輯、1942年11月
131	半沢信一, “Kraniologie der Urahoro-Aino” [謄写版], 1942.
132	菊池欽彌「アイヌ大脳の前頭葉主要溝に就て」、1943年4月 [未見]
133	菊池欽彌「アイヌ大脳の下頭頂溝に就て」、1943年4月 [未見]
134	松本亮正「アイヌ頭蓋骨に於ける外聴道骨瘤に就て」、『北海道帝国大学医学部解剖学教室研究報告』第11輯、1943年10月
135	堀内利罔「「アイヌ」臑骨ノ人類学的研究」、『北海道医学雑誌』第22年第2号、1944年2月
136	奈良勝典「アイヌ大脳側頭葉外側面の脳溝に就て」、1946年1月 [未見]
137	毛利悌雄「アイヌの指紋掌紋の研究 第二報 沙流地方アイヌの掌紋」[謄写版]、[1946年]
138	毛利悌雄・堀内利罔「「アイヌ」及び「ギリヤーク」「オロツコ」の手骨計測」[謄写版]、[1946年]
139	衛藤正孝「日高アイヌ頭蓋骨に於ける齲齒」、1947年4月 [未見]
140	衛藤正孝「日高アイヌ頭蓋骨に於ける歯牙異常」、1947年4月 [未見]
141	衛藤正孝「常呂アイヌ（北見国）頭蓋骨に於ける齲齒」、1947年4月 [未見]
142	衛藤正孝「常呂アイヌ（北見国）頭蓋骨に於ける歯牙異常」、1947年4月 [未見]

No	論文名
143	伊藤昌一「北海道先住民族ノ頭蓋骨ノ研究」(北海道医学会第24回大会特別講演)、『北海道医学雑誌』第23年第1号、1948年9月
144	平井辰男「アイヌ大脳後頭葉の二主要溝に就て」、1949年5月[未見]
145	児玉作左衛門「北海道の先住民族」、『北海道先史学十二講』1949年11月
146	橋本秀夫「アイヌ大脳外側面の脳溝に就て」(日本解剖学会第1回北海道地方会講演)、1950年2月[未見]
147	伊藤昌一「アイヌの墳墓遺跡を訪ねて」、『岩手史学研究』第5号、1950年5月
148	橋本秀夫「アイヌ脳底の動脈に就て」、1950年12月[未見]
149	橋本秀夫「アイヌ大脳静脈系統の研究」、1950年12月[未見]
150	寺崎幸男「北見常呂アイヌ頭蓋骨の發育異常」[手稿]、1951年5月
151	児玉作左衛門、松野正彦、橋本秀夫「アイヌ民族の脳の形態学的研究(I. 大脳外側面の脳溝)」(第55回日本解剖学会総会講演抄録)、『解剖学雑誌』第26巻第2号、1951年7月
152	伊藤昌一「脳頭蓋の長さ、幅、高さの相互関係の一表示法」(第55回日本解剖学会総会演説抄録)、『解剖学雑誌』第26巻第2号、1951年7月
153	児玉作左衛門、松野正彦、橋本秀夫「アイヌ民族の脳の形態学的研究(I. 大脳外側面の脳溝)」(第55回日本解剖学会総会演説抄録)、『解剖学雑誌』第26巻第2号、1951年7月
154	児玉作左衛門「人脳の形態学上の諸問題」(第56回日本解剖学会総会特別講演抄録)、『解剖学雑誌』第26巻第4号、1951年12月
155	倉増猛「アイヌの前大脳動脈及び後大脳動脈に就て」、1952年1月[未見]
156	橋本幸雄「北海道アイヌ下顎骨の形態学的研究」(日本解剖学会第3回北海道地方会講演)、1952年2月[未見]
157	上田米三郎「白老および二風谷部落におけるアイヌ児童の歯牙に就て」[手稿]、1952年2月
158	児玉作左衛門、松野正彦「日高東部アイヌ生体の人類的調査」(第57回日本解剖学会総会紙上発表抄録)、『解剖学雑誌』第27巻総会号、1952年10月
159	児玉作左衛門、上田米三郎「日高アイヌ頭蓋骨に於ける歯牙の人類的研究」(第57回日本解剖学会総会紙上発表抄録)、『解剖学雑誌』第27巻総会号、1952年10月
160	Kodama, S, R. T. Simmons, N. M. Semple, J. J. Graydon, "A Collaborative Genetical Survey in AINU: HIDAKA, Island of HOKKAIDO", <i>American Journal of Physical Anthropology</i> , Vol.11, No.1, March. 1953.
161	児玉作左衛門「アイヌの形質人類学」(第6回日本人類学会日本民族学協会連合大会講演取消)、『日本人類学会日本民族学協会連合大会第六回紀事』1953年10月
162	児玉作左衛門、松野正彦、中林一郎「アイヌ大脳の形態学的研究 第2. 大脳内側面」(第59回日本解剖学会総会演説抄録)、『解剖学雑誌』第29巻第2号、1954年4月
163	児玉作左衛門「アイヌ民族の生態」(第3回日本農村医学会総会特別講演抄録)、『日本農村医学会雑誌』第3巻第1号、1954年6月
164	牧野一郎、岩田千男「頭蓋腔容積計量における一経験」、1954年10月
165	吉井正仁「北見アイヌの頭蓋容積に就て」[手稿]、[1954年頃]
166	吉井正仁「アイヌの脳重に就て」、[1954年頃][未見]
167	伊藤昌一「アイヌの頭蓋について」(第8回日本人類学会日本民族学協会連合大会の「アイヌ問題シンポジウム」発表)、『日本人類学会日本民族学協会連合大会第8回紀事』1955年7月
168	児玉作左衛門「アイヌ民族の人類的研究〈幻燈示説〉」(第8回日本人類学会日本民族学協会連合大会の「アイヌ問題シンポジウム」発表)、『日本人類学会日本民族学協会連合大会第8回紀事』1955年7月
169	松野正彦「北海道先住民族のAcromioglennoidale Breite (Hasebe) について」、『北大解剖研究報告』第8号、1955年9月
170	牧野一郎「樺太アイヌ頭蓋の人類的研究」、『北大解剖研究報告』第12号、1955年9月
171	牧野一郎「樺太アイヌ頭蓋の概形について」、1955年9月
172	遠藤清嗣「アイヌ橈骨の人類的研究」、『北大解剖研究報告』第17号、1955年11月
173	古畑求二、吉井辰生「日高三石アイヌの埋葬法」、『北大解剖研究報告』第19号、1955年12月
174	上野久仁男、吉井辰生「日高アイヌの文身補遺」、『北大解剖研究報告』第20号、1955年12月

No	論文名
175	上野久仁男「日高西部アイヌの体質人類学的研究」、[1955年] [未見]
176	吉井辰生「日高東部アイヌの生体計測について」、『北大解剖研究報告』第23号、1956年1月
177	岩田千男「千島アイヌ頭蓋の型に関する研究」、『北大解剖研究報告』第39号、1956年6月
178	児玉作左衛門「アイヌ人の人類学的研究」(第2回日本解剖学会東北・北海道連合地方会特別講演抄録)、『解剖学雑誌』第31巻第3・4号、1956年7月
179	児玉作左衛門「アイヌの体質」、『日本文化財』第15号、1956年7月
180	伊藤昌一「脳頭蓋の型に関する一考察」(第4回日本解剖学会東北・北海道連合地方会講演)、『解剖学雑誌』第31巻第3・4号、1956年7月
181	吉井辰生「日高東部アイヌの体質人類学的研究」、[1956年] [未見]
182	岩田千男「千島アイヌ頭蓋骨の人類学的研究」〔手稿〕、[1956年]
183	菅沼憲太郎「アイヌの眼窩面脳溝に関する研究」、[1956年頃] [未見]
184	中山康雄「日高アイヌに見られる遺伝学的徴候に就て」、[1954～1956年頃] [未見]
185	鈴木栄「北見アイヌ歯牙の人類学的研究」、『北大解剖研究報告』第52号、1957年2月
186	榊原旦「アイヌ大腿骨の人類学的研究」、『北大解剖研究報告』第59号、1957年4月
187	安部欣司「アイヌ脛骨の人類学的研究」、『北大解剖研究報告』第61号、1957年4月
188	上田米三郎「日高アイヌ歯牙の人類学的研究」、『北大解剖研究報告』第66号、1957年7月
189	岡本寿一「アイヌ小脳の静脈系統の研究」、『北大解剖研究報告』第68号、1957年9月
190	友木昭「アイヌ寛骨の人類学的研究」、『北大解剖研究報告』第74号、1957年10月
191	南部忠「アイヌ大脳の頭頂間溝について」、『北大解剖研究報告』第77号、1957年12月
192	中村正信「アイヌ上腕骨の人類学的研究」、『北大解剖研究報告』第79号、1957年12月
193	松野正彦、加藤三郎「静内アイヌ頭蓋における前頭・側頭骨連接について」、『北大解剖研究報告』第82号、1958年2月
194	小林覚一「森アイヌ歯牙の人類学的研究」、『北大解剖研究報告』第83号、1958年2月
195	畠中規為馳「アイヌ脳におけるジルヴィウス氏窩について」、『北大解剖研究報告』第86号、1958年4月
196	松野正彦、池田実「アイヌ脳におけるTorus postorbitalisについて」、『北大解剖研究報告』第98号、1958年6月
197	山田效「アイヌ大脳中心後溝の形態と他の脳溝に対する関係」、『北大解剖研究報告』第90号、1958年6月
198	京極宏「森アイヌ頭蓋の人類学的研究」、『北大解剖研究報告』第99号、1958年7月
199	松野正彦「アイヌ大脳前頭葉における眼窩溝群の研究」(日本解剖学会第4回東北・北海道連合地方会一般講演)、『解剖学雑誌』第33巻第3・4号、1958年8月
200	松野正彦、岸本総一郎「静内アイヌ頭蓋における翼上骨について」、『北大解剖研究報告』第101号、1958年9月
201	前田秀夫「アイヌ尺骨の人類学的研究」、『北大解剖研究報告』第102号、1958年9月
202	坂田敏太郎「アイヌ寛骨の形態学的研究」、『北大解剖研究報告』第103号、1958年9月
203	松野正彦、田川弘子「十勝アイヌ文身の研究」、『北大解剖研究報告』第113号、1958年11月
204	中根文雄、吉田鉄夫「静内アイヌ頭蓋における眼窩下孔について」、『北大解剖研究報告』第112号、1958年12月
205	沖幸一「アイヌ大脳の眼窩溝群の形態学的研究」、『北大解剖研究報告』第114号、1958年12月
206	田川弘子「十勝アイヌ生体の歯牙における人類学的研究」、『北大解剖研究報告』第121号、1959年1月
207	田川弘子「十勝アイヌ頭蓋に於ける所謂歯槽膿漏について」、『北大解剖研究報告』第122号、1959年1月
208	田川弘子「十勝(浦幌)アイヌ歯牙の人類学的研究」、『北大解剖研究報告』第123号、1959年2月
209	古畑日登見「アイヌ脳外側大脳裂の形態学的研究」、『北大解剖研究報告』第125号、1959年2月
210	松野正彦「アイヌ脳と日本人脳の中心溝附近領域の比較研究」、『北大解剖研究報告』第129号、1959年3月